統一的な基準による財務書類

令和４年度決算分

南陽市財政課

１　統一的な基準による財務書類 P1～P9
（一般・全体・連結 財務書類三表）
２　統一的な基準による財務書類説明資料 P10～P29
３　南陽市の財務書類（分析編）P30～P44

【様式第1号】

一般会計等貸借対照表

（令和　5年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	40,799,983,773	固定負債	15,683,151,538
有形固定資産	38,350,454,859	地方債	13,571,114,538
事業用資産	21,259,634,480	長期未払金	0
土地	8,916,941,935	退職手当引当金	2,112,037,000
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,429,663,820	その他	0
建物減価償却累計額	-18,246,842,613	流動負債	1,709,920,252
工作物	305,466,432	1年内償還予定地方債	1,383,232,927
工作物減価償却累計額	-145,595,094	未払金	0
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	298,519,473
航空機	0	預り金	28,167,852
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0	負債合計	17,393,071,790
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	0	固定資産等形成分	41,568,378,263
インフラ資産	16,867,031,677	余剰分（不足分）	-16,002,424,698
土地	3,553,474,052		
建物	65,520,000		
建物減価償却累計額	-36,224,368		
工作物	30,594,213,245		
工作物減価償却累計額	-17,309,951,252		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	0		
物品	1,285,588,570		
物品減価償却累計額	-1,061,799,868		
無形固定資産	8,208,000		
ソフトウェア	8,208,000		
その他	0		
投資その他の資産	2,441,320,914		
投資及び出資金	254,481,184		
有価証券	55,089,884		
出資金	199,391,300		
その他	0		
投資損失引当金	0		
長期延滞債権	72,003,142		
長期貸付金	15,196,728		
基金	2,109,101,952		
減債基金	101,783,013		
その他	2,007,318,939		
その他	0		
徴収不能引当金	-9,462,092		
流動資産	2,159,041,582		
現金預金	1,303,491,403		
未収金	22,571,639		
短期貸付金	0		
基金	832,978,540		
財政調整基金	823,681,540		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	0		
その他	0		
徴収不能引当金	0	純資産合計	25,565,953,565
資産合計	42,959,025,355	負債及び純資産合計	42,959,025,355

【様式第2号及び第3号(結合)】

一般会計等行政コスト及び純資産変動計算書

自　令和　4年　4月　1日
至　令和　5年　3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額	
		固定資産等形成分	余剰分(不足分)
経常費用	14,937,687,847		
業務費用	8,141,813,391		
人件費	2,620,654,105		
職員給与費	1,772,498,268		
賞与等引当金繰入額	298,519,473		
退職手当引当金繰入額	147,039,618		
その他	402,596,746		
物件費等	5,326,810,736		
物件費	3,310,168,197		
維持補修費	531,790,771		
減価償却費	1,484,851,768		
その他	0		
その他の業務費用	194,348,550		
支払利息	88,498,446		
徴収不能引当金繰入額	6,258,991		
その他	99,591,113		
移転費用	6,795,874,456		
補助金等	2,755,673,899		
社会保障給付	2,353,747,246		
他会計への繰出金	1,600,174,402		
その他	86,278,909		
経常収益	411,190,181		
使用料及び手数料	112,836,636		
その他	298,353,545		
純経常行政コスト	14,526,497,666		
臨時損失	13,858,411		
災害復旧事業費	13,858,399		
資産除売却損	12		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	0		
臨時利益	5,165,458		
資産売却益	5,165,458		
その他	0		
純行政コスト	14,535,190,619		14,535,190,619
財源	14,192,082,137		14,192,082,137
税収等	10,263,077,787		10,263,077,787
国県等補助金	3,929,004,350		3,929,004,350
本年度差額	−343,108,482		−343,108,482
固定資産等の変動(内部変動)		−977,324,909	977,324,909
有形固定資産等の増加		450,501,722	−450,501,722
有形固定資産等の減少		−1,484,851,780	1,484,851,780
貸付金・基金等の増加		1,267,665,400	−1,267,665,400
貸付金・基金等の減少		−1,210,640,251	1,210,640,251
資産評価差額	−14,628	−14,628	
無償所管換等	416,242,025	416,242,025	
その他	−12,598,500	−12,598,500	0
本年度純資産変動額	60,520,415	−573,696,012	634,216,427
前年度末純資産残高	25,505,433,150	42,142,074,275	−16,636,641,125
本年度末純資産残高	25,565,953,565	41,568,378,263	−16,002,424,698

【様式第4号】

一般会計等資金収支計算書

自　令和　4年　4月　1日
至　令和　5年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	13,490,471,037
業務費用支出	6,694,596,581
人件費支出	2,664,546,954
物件費等支出	3,841,958,968
支払利息支出	88,498,446
その他の支出	99,592,213
移転費用支出	6,795,874,456
補助金等支出	2,755,673,899
社会保障給付支出	2,353,747,246
他会計への繰出支出	1,600,174,402
その他の支出	86,278,909
業務収入	14,545,323,568
税収等収入	10,255,459,979
国県等補助金収入	3,880,180,350
使用料及び手数料収入	112,686,436
その他の収入	296,996,803
臨時支出	13,858,399
災害復旧事業費支出	13,858,399
その他の支出	0
臨時収入	0
業務活動収支	1,040,994,132
【投資活動収支】	
投資活動支出	1,718,167,122
公共施設等整備費支出	450,501,722
基金積立金支出	1,226,405,400
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,260,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,264,629,709
国県等補助金収入	48,824,000
基金取崩収入	1,167,355,491
貸付金元金回収収入	43,284,760
資産売却収入	5,165,458
その他の収入	0
投資活動収支	-453,537,413
【財務活動収支】	
財務活動支出	1,356,557,578
地方債償還支出	1,356,557,578
その他の支出	0
財務活動収入	846,400,000
地方債発行収入	846,400,000
その他の収入	0
財務活動収支	-510,157,578
本年度資金収支額	77,299,141
前年度末資金残高	1,198,024,410
本年度末資金残高	1,275,323,551

前年度末歳計外現金残高	23,889,826
本年度歳計外現金増減額	4,278,026
本年度末歳計外現金残高	28,167,852
本年度末現金預金残高	1,303,491,403

【様式第1号】

全体貸借対照表

（令和　5年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	62,839,814,160	固定負債	30,358,512,754
有形固定資産	58,464,372,693	地方債	20,759,920,392
事業用資産	21,259,634,481	長期未払金	0
土地	8,916,941,935	退職手当引当金	2,400,427,594
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,430,933,970	その他	7,198,164,768
建物減価償却累計額	−18,248,112,762	流動負債	2,713,921,857
工作物	305,466,432	1年内償還予定地方債	2,161,160,803
工作物減価償却累計額	−145,595,094	未払金	189,639,083
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	326,752,082
航空機	0	預り金	36,369,889
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0	負債合計	33,072,434,611
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	0	固定資産等形成分	63,553,349,027
インフラ資産	36,843,703,791	余剰分（不足分）	−30,128,744,292
土地	3,810,809,127		
建物	640,593,593		
建物減価償却累計額	−361,739,402		
工作物	61,839,815,618		
工作物減価償却累計額	−29,332,560,798		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	246,785,653		
物品	1,976,872,069		
物品減価償却累計額	−1,615,837,648		
無形固定資産	937,121,281		
ソフトウェア	8,208,000		
その他	928,913,281		
投資その他の資産	3,438,320,186		
投資及び出資金	257,820,184		
有価証券	55,089,884		
出資金	202,730,300		
その他	0		
投資損失引当金	0		
長期延滞債権	154,968,908		
長期貸付金	15,196,728		
基金	3,032,496,634		
減債基金	101,783,013		
その他	2,930,713,621		
その他	85,680		
徴収不能引当金	−22,247,948		
流動資産	3,657,225,186		
現金預金	2,647,328,856		
未収金	155,277,515		
短期貸付金	0		
基金	832,978,540		
財政調整基金	823,681,540		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	15,784,701		
その他	11,600,000		
徴収不能引当金	−5,744,426	純資産合計	33,424,604,735
資産合計	66,497,039,346	負債及び純資産合計	66,497,039,346

【様式第2号及び第3号（結合）】

全体行政コスト及び純資産変動計算書

自　令和　4年　4月　1日
至　令和　5年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額	
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）
経常費用	21,936,872,705		
業務費用	9,983,252,014		
人件費	2,870,591,668		
職員給与費	1,983,977,448		
賞与等引当金繰入額	326,752,082		
退職手当引当金繰入額	133,106,792		
その他	426,755,346		
物件費等	6,674,709,475		
物件費	3,857,002,289		
維持補修費	581,077,348		
減価償却費	2,236,629,838		
その他	0		
その他の業務費用	437,950,871		
支払利息	202,561,819		
徴収不能引当金繰入額	19,942,670		
その他	215,446,382		
移転費用	11,953,620,691		
補助金等	2,951,936,413		
社会保障給付	8,915,395,369		
他会計への繰出金	0		
その他	86,288,909		
経常収益	1,490,143,157		
使用料及び手数料	1,160,954,550		
その他	329,188,607		
純経常行政コスト	20,446,729,548		
臨時損失	26,532,732		
災害復旧事業費	13,858,399		
資産除売却損	11,591,052		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	1,083,281		
臨時利益	30,606,824		
資産売却益	5,165,458		
その他	25,441,366		
純行政コスト	20,442,655,456		20,442,655,456
財源	20,252,724,180		20,252,724,180
税収等	12,526,655,401		12,526,655,401
国県等補助金	7,726,068,779		7,726,068,779
本年度差額	−189,931,276		−189,931,276
固定資産等の変動（内部変動）		−960,997,240	960,997,240
有形固定資産等の増加		1,158,710,216	−1,158,710,216
有形固定資産等の減少		−2,248,220,890	2,248,220,890
貸付金・基金等の増加		1,391,153,685	−1,391,153,685
貸付金・基金等の減少		−1,262,640,251	1,262,640,251
資産評価差額	−14,628	−14,628	
無償所管換等	424,690,656	424,690,656	
その他	−12,598,500	−12,598,500	0
本年度純資産変動額	222,146,252	−548,919,712	771,065,964
前年度末純資産残高	33,202,458,483	64,102,268,739	−30,899,810,256
本年度末純資産残高	33,424,604,735	63,553,349,027	−30,128,744,292

【様式第4号】

全体資金収支計算書

自　令和　4年　4月　1日
至　令和　5年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	19,506,862,917
業務費用支出	7,794,268,408
人件費支出	2,929,596,983
物件費等支出	4,446,716,544
支払利息支出	202,561,819
その他の支出	215,393,062
移転費用支出	11,712,594,509
補助金等支出	2,710,910,231
社会保障給付支出	8,915,395,369
他会計への繰出支出	0
その他の支出	86,288,909
業務収入	21,474,809,018
税収等収入	12,479,961,327
国県等補助金収入	7,503,465,396
使用料及び手数料収入	1,163,550,430
その他の収入	327,831,865
臨時支出	14,941,680
災害復旧事業費支出	13,858,399
その他の支出	1,083,281
臨時収入	-1,597,914
業務活動収支	1,951,406,507
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,423,732,489
公共施設等整備費支出	1,032,578,804
基金積立金支出	1,349,893,685
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,260,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,480,020,512
国県等補助金収入	212,214,803
基金取崩収入	1,219,355,491
貸付金元金回収収入	43,284,760
資産売却収入	5,165,458
その他の収入	0
投資活動収支	-943,711,977
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,163,216,333
地方債償還支出	2,163,216,333
その他の支出	0
財務活動収入	1,225,700,000
地方債発行収入	1,225,700,000
その他の収入	0
財務活動収支	-937,516,333
本年度資金収支額	70,178,197
前年度末資金残高	2,548,982,807
本年度末資金残高	2,619,161,004

前年度末歳計外現金残高	23,889,826
本年度歳計外現金増減額	4,278,026
本年度末歳計外現金残高	28,167,852
本年度末現金預金残高	2,647,328,856

【様式第1号】

連結貸借対照表

（令和　5年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	66,659,982,979	固定負債	32,606,726,323
有形固定資産	61,997,857,911	地方債等	22,478,083,989
事業用資産	24,142,718,082	長期未払金	0
土地	9,421,555,651	退職手当引当金	2,796,287,153
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	34,366,014,102	その他	7,332,355,181
建物減価償却累計額	−20,272,902,850	流動負債	3,106,173,084
工作物	1,055,098,263	1年内償還予定地方債等	2,405,483,762
工作物減価償却累計額	−437,273,982	未払金	274,357,948
船舶	0	未払費用	792,194
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	386,470,087
航空機	0	預り金	37,811,622
航空機減価償却累計額	0	その他	1,257,471
その他	0	負債合計	35,712,899,407
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	10,226,898	固定資産等形成分	67,364,493,190
インフラ資産	36,845,982,118	余剰分（不足分）	−32,316,891,103
土地	3,810,809,127	他団体出資等分	0
建物	640,593,593		
建物減価償却累計額	−361,739,402		
工作物	61,851,150,578		
工作物減価償却累計額	−29,341,617,431		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	246,785,653		
物品	5,702,051,614		
物品減価償却累計額	−4,692,893,903		
無形固定資産	938,040,086		
ソフトウェア	8,953,252		
その他	929,086,834		
投資その他の資産	3,724,084,981		
投資及び出資金	189,336,984		
有価証券	55,089,884		
出資金	134,235,300		
その他	11,800		
長期延滞債権	155,004,310		
長期貸付金	20,022,747		
基金	3,381,883,335		
減債基金	101,783,013		
その他	3,280,100,322		
その他	85,680		
徴収不能引当金	−22,248,075		
流動資産	4,100,518,516		
現金預金	2,922,244,474		
未収金	320,260,833		
短期貸付金	0		
基金	832,978,540		
財政調整基金	823,681,540		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	22,127,189		
その他	11,734,398		
徴収不能引当金	−8,826,918		
繰延資産	0	純資産合計	35,047,602,087
資産合計	70,760,501,494	負債及び純資産合計	70,760,501,494

【様式第2号及び第3号】

連結行政コスト及び純資産変動計算書

自　令和　4年　4月　1日
至　令和　5年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額		
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）	他団体出資等分
経常費用	23,311,619,437			
業務費用	11,974,526,837			
人件費	3,812,385,029			
職員給与費	2,827,463,183			
賞与等引当金繰入額	386,470,087			
退職手当引当金繰入額	170,793,147			
その他	427,658,612			
物件費等	7,671,902,575			
物件費	4,538,850,766			
維持補修費	685,648,351			
減価償却費	2,435,773,027			
その他	11,630,431			
その他の業務費用	490,239,233			
支払利息	214,815,161			
徴収不能引当金繰入額	19,970,697			
その他	255,453,375			
移転費用	11,337,092,600			
補助金等	2,334,676,566			
社会保障給付	8,915,400,541			
その他	87,015,493			
経常収益	2,527,150,879			
使用料及び手数料	2,133,760,988			
その他	393,389,891			
純経常行政コスト	20,784,468,558			
臨時損失	61,408,275			
災害復旧事業費	13,858,399			
資産除売却損	33,525,721			
損失補償等引当金繰入額	0			
その他	14,024,155			
臨時利益	43,954,415			
資産売却益	7,127,046			
その他	36,827,369			
純行政コスト	20,801,922,418		20,801,922,418	
財源	20,725,867,825		20,725,867,825	
税収等	12,935,327,594		12,935,327,594	
国県等補助金	7,790,540,231		7,790,540,231	
本年度差額	−76,054,593		−76,054,593	0
固定資産等の変動（内部変動）		−1,061,088,589	1,061,088,589	
有形固定資産等の増加		1,356,859,247	−1,356,859,247	
有形固定資産等の減少		−2,469,298,748	2,469,298,748	
貸付金・基金等の増加		1,335,782,525	−1,335,782,525	
貸付金・基金等の減少		−1,284,431,613	1,284,431,613	
資産評価差額	−14,628	−14,628		
無償所管換等	424,482,498	424,482,498		
他団体出資等分の増加	0			0
他団体出資等分の減少	0			0
比例連結割合変更に伴う差額	−894,319,604	0	−894,319,604	
その他	−75,652,585	−1,400,881,734	1,325,229,149	
本年度純資産変動額	−621,558,912	−2,037,502,453	1,415,943,541	0
前年度末純資産残高	35,669,160,999	69,401,995,643	−33,732,834,644	0
本年度末純資産残高	35,047,602,087	67,364,493,190	−32,316,891,103	0

【様式第4号】

連結資金収支計算書

自　令和　4年　4月　1日
至　令和　5年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	20,667,469,998
業務費用支出	9,571,403,580
人件費支出	3,863,919,848
物件費等支出	5,237,205,862
支払利息支出	214,877,815
その他の支出	255,400,055
移転費用支出	11,096,066,418
補助金等支出	2,093,650,384
社会保障給付支出	8,915,400,541
その他の支出	87,015,493
業務収入	22,941,411,054
税収等収入	12,873,713,608
国県等補助金収入	7,563,957,657
使用料及び手数料収入	2,118,218,905
その他の収入	385,520,884
臨時支出	27,882,554
災害復旧事業費支出	13,858,399
その他の支出	14,024,155
臨時収入	9,788,089
業務活動収支	2,255,846,591
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,626,994,236
公共施設等整備費支出	1,227,747,737
基金積立金支出	1,357,952,299
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,294,200
その他の支出	0
投資活動収入	1,516,938,151
国県等補助金収入	225,379,509
基金取崩収入	1,240,654,356
貸付金元金回収収入	43,777,240
資産売却収入	7,127,046
その他の収入	0
投資活動収支	−1,110,056,085
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,390,926,977
地方債等償還支出	2,389,661,569
その他の支出	1,265,408
財務活動収入	1,359,066,467
地方債等発行収入	1,359,066,467
その他の収入	0
財務活動収支	−1,031,860,510
本年度資金収支額	113,929,996
前年度末資金残高	2,788,625,958
比例連結割合変更に伴う差額	−8,779,497
本年度末資金残高	2,893,776,457

前年度末歳計外現金残高	24,011,281
本年度歳計外現金増減額	4,456,736
本年度末歳計外現金残高	28,468,017
本年度末現金預金残高	2,922,244,474

令和4年度

南陽市

統一的な基準による財務書類

説明会分析資料

令和6年3月

落合公認会計士事務所

目　　次

Ⅰ　令和４年度　南陽市財務書類の公表について

Ⅱ　地方公会計制度について
（1）固定資産台帳と財務書類の作成の必要性
（2）地方自治体における地方債の特徴
（3）企業会計手法の導入
（4）財務書類とは？
（5）統一的な基準の活用方法
（6）日々仕訳とは？
（7）財務書類の作成ツール

Ⅲ　令和４年度　財務書類　（要約）
（1）貸借対照表〔バランスシート〕
（2）行政コスト計算書及び純資産変動計算書
（3）資金収支計算書
（4）相関図

Ⅳ　比率

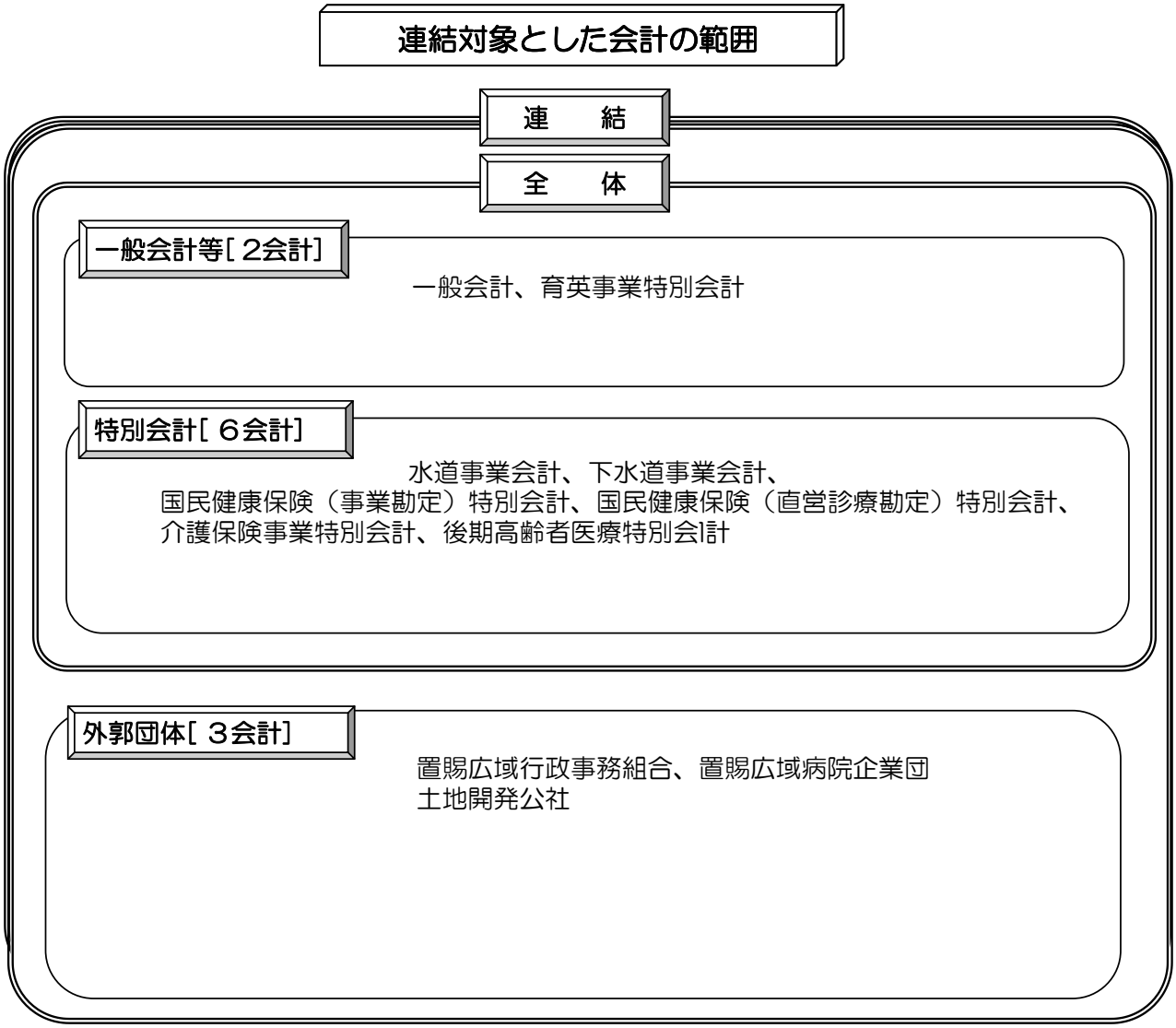
Ⅴ　財務書類分析からわかること
（1）比較分析のための前提条件
（2）貸借対照表から見える将来の負担
（3）実質債務（地方債等と現金預金）の状況
（4）純資産変動計算書の「本年度差額」の状況
（5）純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況
（6）資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支の状況
（7）歳入歳出決算書の経年データ

Ⅰ　令和４年度　南陽市財務書類の公表について

平成１８年６月に成立した「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」を契機に、地方の資産・債務改革の一環として「新地方公会計制度の整備」が位置づけられました。これにより「新地方公会計制度研究会報告書」で示された「基準モデル」又は「総務省方式改訂モデル」を活用して、地方公共団体単体及び関連団体等を含む連結ベースでの財務書類を人口３万人以上の都市においては、平成２１年度までに整備し公表するよう通知されました。

こうした状況を踏まえ、本市では平成２０年度から「基準モデル」により資産台帳の整備に着手し、複式簿記に基づき発生主義による財務書類を作成することにより、本市が所有する全ての資産と負債状況や行政サービスに要したコストを把握してまいりました。

しかし、平成２６年４月３０日に財務書類の作成方法の統一化のための「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書」が取りまとめられ、平成２７年１月２３日に「統一的な基準による地方公会計マニュアル」が取りまとめられました。本市では平成２７年度から「統一的な基準」により財務書類を作成することにしました。これにより団体間の比較可能性が確保され、決算分析や予算編成へ活用されています。



※　全体とは、一般会計等に特別会計を含めたもので、**連結**とは、全体に外郭団体を含めたものです。

なお、外郭団体のうち第三セクターについては、市の出資比率が５０％以上の団体を対象としています。

Ⅱ 地方公会計制度について

1. 固定資産台帳と財務書類の作成の必要性

① 税収も地方債も同じ財源だが、返済義務の有無で相違するので、地方債に依存すると債務肥大化する。
② 債務が肥大化した理由の一つは、財源に借金を含めて、財政運営をしてきたためである。
③ 財政改善のための歳入増、歳出減は難しく、資産債務改革が必要となり、資産に手を付けることになった。
④ 地方交付税算定のための公有財産台帳並びに各種法定台帳の作成（数量管理）から、有効活用のための固定資産台帳（金額管理）の作成。
⑤ 厳しい財政事情のもと、財政の透明性、効率化、適正化が求められ、企業会計手法を活用した財務書類の開示も求められた。

2. 地方自治体における地方債の特徴

固定資産形成に充てるための地方債には、次の魅力がある。
① 財政運営上、借金は、現役世代と将来世代をつなぐ世代間公平性を確保するための、重要な架け橋である。
② 予算編成上、後日交付税措置される借金は、借金した方が得なので、税収・補助金収入と同様に、重要な財源である。

3. 企業会計手法の導入

（1）官庁会計に収支の概念を導入した
① 予算の適正・確実な執行においては、歳入と歳出は一致しなければならない。
② 財政状態を診断するためには、歳入から歳出を差し引いた収支の概念が必要となる。
（2）導入例
① 貸借対照表の純資産
② 資金収支計算書の基礎的財政収支（借金に依存しなかった場合の収支）
（あ）基礎的財政収支とは、計算上は、歳入から繰越金と公債発行を、歳出から公債費を、除外した収支。
（い）借金を財源とした結果、債務が肥大化したので、借金に依存しなかった場合の収支を把握する。

4. 財務書類とは？

（1）総務省の財務書類に対する考え方
① 財務書類の作成指針として、「民間の利益目的」でなく、「財政の三つの役割」を基礎にしている。
② 「財政の三つの役割」には、「資源配分機能」、「所得再分配機能」および「経済調整機能」。
③ 「資源配分機能」は、現役世代に対する資源配分と、将来世代に対する資源配分がある。
（2） 財務書類とは、自治体の「立ち位置」・「身の丈」を表す書類で、健康診断書でもあり、4表又は3表から構成される。

種類	数値の内容	収支尻概念の導入	情報内容
貸借対照表	発生主義データを含み、 年度末時点の財政状態を示す	純資産	年度末の財政状態 を示す（ストック情報）
行政コスト計算書	減価償却費等の発生主義データを含む 現役世代に対する資源配分の内訳を示す	純行政コスト	1年間の運営状況 を示す（フロー情報）
純資産変動計算書	現役世代に対する資源配分の合計額と将来世代に対する資源配分 の増減額、並びに税収等財源を対比させ運営状況を示す	本年度差額	
資金収支計算書	現金主義により、 資金収支による運営状況を示す	基礎的財政収支	

（3）3表様式の長所
① 現役世代と将来世代に対する資源配分の状況の各内訳が、一つの表に集約されたので、議員、住民に対する説明が、しやすくなった。
② 行政コスト計算書と純資産変動計算書を結合させた書類が、民間企業の損益計算書に相当するので、理解しやすい。
（4）連結決算とは？
① 全体会計＝親＋子　　＝一般会計等決算＋公営事業会計
連結決算＝親＋子＋親戚＝一般会計等決算＋公営事業会計＋外郭団体（一組・広域＋関係団体）
② 連結決算の必要性
・ 親・子・親戚間で、「繰出金」、「負担金・補助金」、「委託費」を支出しており、資金関係が密接なため、相殺表示が必要である.。
（5）発生主義決算とは？
① ・歳入・歳出決算数値に、「見えないおカネ」を加えて決算すること。
・「見えないおカネ」とは、将来、資金の流出入が見込まれる事象に係る数値で、「発生主義数値」ともいう。
② 発生主義数値の例
・将来、資金の出し入れを伴い、債権債務の確定したもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・収入未済額、リース債務等
・現在、債権・債務は確定していないが、確定に準じたもの・・・・・・・・・・・・・・・・・賞与引当金、退職手当引当金等
・現時点の保有する資産の価値の増減を推定する項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・減価償却費、不納欠損額、評価損益等

5. 統一的な基準の活用方法

（1）固定資産データの活用

毎年の「維持費」に「減価償却費」を加えてフルコストによる「事業別または施設別収支」を作成すること。

① 施設の更新、統廃合について、リストアップして議論する段階で、数値情報を提供する。

② フルコストによる受益者負担割合算定のための数値情報、及び一人あたりコスト情報を提供する。

③ 民間の資金・ノウハウを活用したPPP／PFIの導入のために、固定資産データの公表が期待される。

（2）財務書類の活用

年1回作成される財務書類は、自治体の「健康診断書」である。

① 誰が活用するのか・・・財政経営者つまり首長から財政までのラインで特に「財政課長」である。

② 活用とは？・・・・・・・・・・・経年比較、他団体比較を通じて、自分の役所の状況を読み取り、今後に活かすことである。

住民並びに住民の代表から質問があった場合、「財政課長が読み取ったことを、首長までが共有し、今後に活かしているので、活用されている。」

6. 日々仕訳とは？

（1）目的により簿記の方法が異なる。

① 予算の適正・確実な執行のためには、「複式簿記」より「単式簿記」が優れている。

② 財務書類を作成する場合、「見えないお金」も含むために、数値の正確性を担保するためには、「複式簿記」が必要。

（2）複式簿記の記帳のタイミング

① 「日々仕訳」が望ましいとされているが、そのためには全庁的に知識が必要。

② 金銭の入出金程度の記帳ならまだしも、日常業務に加えて複式簿記の習得など、民間ではあり得ない。

③ 事務負担や経費負担を考えて、「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書（平成26年4月総務省）294項」に記載された「期末一括仕訳方式」により作成する。

7. 財務書類の作成ツール

① 「財務書類作成要領２９段落」による集計値を使用する方法によれば、仕訳変換処理で特定できる場合の仕訳件数は、概ね節の科目数（歳入16・歳出28）程度の仕訳で済むので、表計算ソフトでの対応が可能となり、検証もしやすい。

② 当事務所の財務書類作成ソフトは、平成２７年１１月２７日に特許権を取得した。

（参考）

（イ）統一的な基準で求められる固定資産台帳の基準モデル団体への取り扱い

① 固定資産マニュアルによれば、「既に固定資産台帳が基準モデル等に基づいて評価されている資産について、合理的かつ客観的な基準によって評価されたものであれば、引き続き、当該評価額によることを許容する」と記載し、二重負担を回避している。

② 道路、河川及び水路の敷地については、統一的な基準では、一定の場合１円評価としており、基準モデル評価を継続する場合、基準が異なることによる評価誤差が大きくなるので注記が求められる。

（ロ）統一的な基準で求められる複式簿記の方法

（1）財務書類作成の概略

① すべての資金取引について「仕訳変換」を行い、かつ、すべての非資金取引について「仕訳処理」を行い、仕訳帳に記載する。

② 仕訳帳が完成したら、会計ソフト、表計算ソフト等により集計し、総勘定元帳並びに試算表に転記し、財務書類が完成。

（2）仕訳帳への記載の仕方

① 単式簿記により記帳された歳入歳出データは、「仕訳変換処理」により、仕訳帳に記載する。

(a)予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できる」場合

・工事請負費・公有財産購入費・委託費等の固定資産に関係する予算科目を除くと、その多くの予算科目は、行政コストに計上されるものと資産に計上されるものとに、特定されている。

・特定された予算科目は、統一的な基準の地方公会計マニュアル資金仕訳変換表「別表6-1:6-2　」に従い、仕訳変換処理する。

・仕訳変換処理の設定をしておけば仕訳集計が、<u>自動計算されるので、簿記の知識の有無は重要ではない。</u>

(b)予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できない」場合

・「特定できない」場合とは、工事請負費等の固定資産に関係する予算科目の場合であり、個別伝票毎に、その歳入歳出について、行政コストなのか資産形成なのか、科目及び金額を特定する必要がある。

・資産形成か維持補修費の特定は、<u>簿記の知識が必要となり、システムの自動計算で変換してくれない。</u>

② 仕訳記帳されていない非資金取引（見えないお金）は、複式簿記により、仕訳帳に記載する。

・発生主義取引による非資金仕訳例は、「財務書類作成要領」の「別表７」に例示されている。

・作成担当者は、発生主義データの意味、計算過程を知る必要があるので、<u>複式簿記の知識が必要</u>である。

（3）仕訳変換処理の単位

① 仕訳帳は、歳入歳出データを単位として、伝票単位毎に作成することを、原則とする。

② 歳入歳出データとの整合性が検証できる場合には、「予算科目単位で集計した歳入歳出データ」に仕訳を付与し、仕訳帳の1単位とすることも妨げない。」という、予算科目単位の集計値による変換法とする。（マニュアル「財務書類作成要領２９段落」）

Ⅲ 令和４年度 財務書類 （要約）

（1）貸借対照表（バランスシート）（令和5年3月31日）

令和5年3月31日現在に保有する資産、負債、純資産を表示したもので、地方自治体が、住民サービスを提供するために保有している資産と、その資産をどのような財源（負債・純資産）で賄ってきたのかについて、総括的に示したものです。行政的には、資産は、サービス提供能力を示し、負債は、将来世代の負担を示し、純資産は、現在までの世代の負担と捉えます。

（単位：百万円）

資産の部							負債の部						
項目	一般会計等		全体		連結		項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率		金額	比率	金額	比率	金額	比率
(1)固定資産	40,800	95%	62,840	95%	66,660	94%	(1)固定負債	15,683	37%	30,359	46%	32,607	46%
(1)有形固定資産	38,350	89%	58,464	88%	61,998	88%	①地方債等	13,571	32%	20,760	31%	22,478	32%
①事業用資産	21,260	49%	21,260	32%	24,143	34%	②退職手当引当金	2,112	5%	2,400	4%	2,796	4%
②インフラ資産	16,867	39%	36,844	55%	36,846	52%	③その他	0	0%	7,198	11%	7,332	10%
③物品	224	1%	361	1%	1,009	1%	(2)流動負債	1,710	4%	2,714	4%	3,106	4%
(2)無形固定資産	8	0%	937	1%	938	1%	①1年内償還予定地方債等	1,383	3%	2,161	3%	2,405	3%
(3)投資その他の資産	2,441	6%	3,438	5%	3,724	5%	②未払金	0	0%	190	0%	274	0%
①投資及び出資金	254	1%	258	0%	189	0%	③その他	327	1%	363	1%	426	1%
②長期延滞債権	72	0%	155	0%	155	0%							
③基金	2,109	5%	3,032	5%	3,382	5%	負債の部合計	17,393	40%	33,072	50%	35,713	50%
④徴収不能引当金	−9	0%	−22	0%	−22	0%	純資産の部						
⑤その他	15	0%	15	0%	20	0%	固定資産等形成分	41,568	97%	63,553	96%	67,364	95%
(2)流動資産	2,159	5%	3,657	5%	4,101	6%	余剰分（不足分）	−16,002	−37%	−30,129	−45%	−32,317	−46%
①現金預金	1,303	3%	2,647	4%	2,922	4%							
②未収金	23	0%	155	0%	320	0%							
③財政調整基金等	833	2%	833	1%	833	1%							
④徴収不能引当金	0	0%	−6	0%	−9	0%							
⑤その他	0	0%	27	0%	34	0%	純資産の部合計	25,566	60%	33,425	50%	35,048	50%
資産の部合計	42,959	100%	66,497	100%	70,761	100%	負債・純資産の部合計	42,959	100%	66,497	100%	70,761	100%

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結	項目	一般会計等	全体	連結
資産の部	145 万円	224 万円	238 万円	負債の部	59 万円	111 万円	120 万円
				純資産の部	86 万円	113 万円	118 万円

項目の説明

（1）-(1)有形固定資産	①事業用資産 ： 庁舎や学校などの有形固定資産
	②インフラ資産 ： 道路や河川などの社会基盤となる資産
	③物品 ： 器具備品や機械装置などの資産
（1）-(2)無形固定資産	ソフトウェア等無形の資産
（1）-(3)投資その他の資産	①投資及び出資金 ： 運用目的の有価証券や出資金等の資産
	②長期延滞債権 ： 税等の未収金や貸付金などの回収期限到来後1年を経過した資産
	③基金 ： 特定の目的のために積立した資産
	④徴収不能引当金 ： 長期延滞債権や長期の貸付金に対して徴収不能とみられる金額を見積り引当した金額
（2）流動資産	①現金預金 ： 形式収支額（歳入歳出の差し引き額）や歳計外現金などの現金や預金の資産
	②未収金 ： 税収や使用料手数料のうち回収期限到来後1年を経過していない資産
	③財政調整基金等 ： 財政調整基金や1年以内に地方債の償還に充てられる減債基金
（1）固定負債	①地方債等 ： 地方債・借入金残高のうち翌年度に償還する額を除いた残高
	②退職手当引当金 ： 将来の退職者に対する給付すべきこととなる退職金の引当額
（2）流動負債	①1年内償還予定地方債等 ： 地方債・借入金残高のうち翌年度償還予定額
	②未払金 ： 企業会計団体の財貨または用役の提供を受けたが、支払が済んでいない残高
◎ 純資産合計	これまでの世代が負担して蓄積された資産

概 要

今までに南陽市では、一般会計等ベースで430億円、全体ベースで665億円、連結ベースで708億円の資産を形成してきています。

そのうち、純資産である、256億円（一般会計等）、334億円（全体）、350億円（連結）については、これまでの世代の負担で支払いが済んでおり、負債である174億円（一般会計等）、331億円（全体）、357億円（連結）について、これからの世代が負担していくことになります。

※ 令和5年3月31日の南陽市の人口：　29,703　人

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(2)行政コスト計算書及び純資産変動計算書(令和4年4月1日から令和5年3月31日)

行政コスト計算書は、1年間の行政運営コストのうち、福祉サービスなどの提供といった資産形成に結びつかない行政サービスに要したコストを人件費、物件費、その他の業務費用、移転費用に区分して表示したものです。

純資産変動計算書(NWM)は、純資産(過去の世代や国・都道府県が負担した将来返済しなくてよい財産)が年度中にどのように増減したかを、①財源、②資産評価差額、③無償所管替等、④その他に区分して表示したものです。

(単位:百万円)

項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率
1 経常費用 計 (行政コスト総額)	14,938	103%	21,937	107%	23,312	112%
① 人件費	2,621	18%	2,871	14%	3,812	18%
② 物件費等	5,327	37%	6,675	33%	7,672	37%
うち減価償却費	1,485	10%	2,237	11%	2,436	12%
③ その他の業務費用	194	1%	438	2%	490	2%
④ 移転費用	6,796	47%	11,954	58%	11,337	55%
2 経常収益	411	3%	1,490	7%	2,527	12%
3 臨時損失	14	0%	27	0%	61	0%
4 臨時利益	5	0%	31	0%	44	0%
純行政コスト	14,535	100%	20,443	100%	20,802	100%
5 財源	14,192	98%	20,253	99%	20,726	100%
① 税収等	10,263	71%	12,527	61%	12,935	62%
② 国県等補助金	3,929	27%	7,726	38%	7,791	37%
本年度差額	-343	-2%	-190	-1%	-76	0%
6 資産評価差額	-0	0%	-0	0%	-0	0%
7 無償所管替等	416	3%	425	2%	424	2%
8 その他の純資産変動額	-13	0%	-13	0%	-970	-5%
本年度純資産変動額	61	0%	222	1%	-622	-3%
前年度末純資産残高	25,505	-	33,202	-	35,669	-
本年度末純資産残高	25,566	-	33,425	-	35,048	-

※固定資産等の変動(内部変動)・固定資産等形成分	-977	-	-961	-	-1,061	-
・有形固定資産等の増加	451	-	1,159	-	1,357	-
・有形固定資産等の減少	1,485	-	2,248	-	2,469	-
・貸付金・基金等の増加	1,268	-	1,391	-	1,336	-
・貸付金・基金等の減少	1,211	-	1,263	-	1,284	-

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結
1 純行政コスト	49 万円	69 万円	70 万円
2 財源	48 万円	68 万円	70 万円
3 本年度差額 (2財源－1純行政コスト)	-1 万円	-1 万円	-0 万円

項目の説明

1 経常費用	①人件費 : 職員給与や議員報酬、退職給付費用など
	②物件費等 : 備品や消耗品、委託費、使用料施設等の維持修繕に係る経費や事業用資産の減価償却費など
	③その他の業務費用 : 地方債、関係団体の借入金の償還利子や徴収不能引当金繰入額など
	④移転費用 : 住民への補助金や児童手当、生活保護費などの社会保障費など
2 経常収益	施設を使用した際に徴収する使用料や証明書の発行手数料、財産売払収入、雑入など
3 臨時損失	災害復旧事業費、資産の除売却損など臨時に発生するもの
4 臨時利益	資産の売却益など臨時に発生するもの
5 財源	①税収等 : 市税や利子割交付金などの交付金、特別会計の保険料等の収入など
	②国県等補助金 : 国や都道府県からの補助金収入
6 資産評価差額	有価証券等の評価差額など
7 無償所管替等	無償で譲渡または取得した固定資産の評価額等など
※固定資産の変動	有形固定資産・貸付金・基金等将来世代に対する資産形成の状況をいう

概 要

令和4年度の純行政コストは、一般会計等ベースで145億円、全体ベース204億円、連結ベースで208億円になります。

住民の皆さんが負担した市税や国県等補助金などの財源は、一般会計等ベースで142億円、全体ベースで203億円、連結ベースでは207億円になります。

純行政コストと財源に資産評価差額,無償所管替等を加減した本年度純資産変動額は、一般会計等ベースで1億円、全体ベースで2億円、連結ベースで△6億円であり、将来返済しなくてよい財産が一般会計等、全体で増加し、連結で減少したことになります。

また、将来の世代に対する固定資産の変動状況ですが、一般会計等ベースで△10億円、全体ベースで△10億円、連結ベースで△11億円となり、一般会計等、全体、連結すべてで減少しました。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

（３）資金収支計算書（令和4年4月1日から令和5年3月31日）

資金収支計算書は、1年間の資金の出入りを、現役世代に対する「業務活動収支」と、将来世代に対する「投資活動収支」と、将来世代が負担すべき「財務活動収支」という三つに区分した計算書です。

（単位：百万円）

項目	一般会計等	全体	連結
(イ)業務活動収支（④−③+②−①）	1,041	1,951	2,256
①業務支出（注）	13,490	19,507	20,667
②業務収入	14,545	21,475	22,941
③臨時支出	14	15	28
④臨時収入	0	−2	10
(ロ)投資活動収支（②−①）	−454	−944	−1,110
①投資活動支出	1,718	2,424	2,627
②投資活動収入	1,265	1,480	1,517
利払後基礎的財政収支(イ＋ロ)	**587**	**1,008**	**1,146**
(ハ)財務活動収支（②−①）	−510	−938	−1,032
①財務活動支出	1,357	2,163	2,391
②財務活動収入	846	1,226	1,359
1　本年度資金収支額(イ＋ロ＋ハ)	77	70	114
2　前年度末歳計現金残高	1,198	2,549	2,789
3　比例連結割合変更に伴う差額	0	0	−9
4　本年度末歳計現金残高(1＋2＋3)	1,275	2,619	2,894
5　本年度末歳計外現金残高	28	28	28
6　本年度末現金預金残高(4＋5)	1,303	2,647	2,922
（注）うち、地方債等支払利息支出	88	203	215

項目の説明

イ−①業務支出 ： 行政サービスを行う中で、毎年度継続的に支出されるもの
（人件費、物件費、補助費、扶助費など）

イ−②業務収入 ： 行政サービスを行う中で、毎年度継続的に収入されるもの
（市税、保険料、使用料、手数料など）

イ−③臨時支出 ： 行政サービスを行う中で、臨時的に支出されるもの（災害復旧事業費など）

イ−④臨時収入 ： 行政サービスを行う中で、臨時的に収入されるもの
（資産の売却に伴う収入など）

ロ−①投資活動支出 ： 公共施設や道路整備などの資産形成、投資や貸付金などの金融資産形成に支出したもの

ロ−②投資活動収入 ： 公共施設の資産形成の財源に充てられた補助金収入、土地などの固定資産の売却収入など

ハ−①財務活動支出 ： 地方債や借入金などの元本の償還

ハ−②財務活動収入 ： 地方債や借入金の収入

概　要

令和4年度は、一般会計等ベースで1億円、全体ベースで1億円、連結ベースで1億円の資金が変動し、期末資金残高は、一般会計等ベースで13億円、全体ベースで26億円、連結ベースで29億円になりました。

利払後基礎的財政収支は、公債費を賄う財源となるものですが、一般会計等ベースで6億円、全体ベースで10億円、連結ベースで11億円でした。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

（4）財務書類の相関図

下記は、財務書類3表の関係を表しています。（一般会計等）

（単位：百万円）

【資金収支計算書＝CF】		
項目		金額
(イ)業務活動収支		1,041
	①業務支出	13,490
	②業務収入	14,545
	③臨時支出	14
	④臨時収入	0
(ロ)投資活動収支		−454
	①投資活動支出	1,718
	②投資活動収入	1,265
(ハ)財務活動収支		−510
	①財務活動支出	1,357
	②財務活動収入	846
1 本年度資金収支額(イ＋ロ＋ハ)		77
2 前年度末資金残高		1,198
3 本年度末資金残高(1＋2)		1,275
4 本年度末歳計外現金残高		28
5 本年度末現金預金残高(3＋4)		1,303

（注）1年間の資金の出入りを表す資金収支計算書の「本年度末現金預金残高」は、下記の貸借対照表の資産の部に計上されます。

（単位：百万円）

【行政コスト計算書及び純資産変動計算書＝NW】				
項目		金額	4表形式では、純行政コストまでが「行政コスト計算書」、財源から下が「純資産変動計算書」となる	
経常費用		14,938		
	業務費用	8,142		
	移転費用	6,796		
経常収益		411		
臨時損失		14	固定資産等形成分	余剰分（不足分）
臨時利益		5		
純行政コスト		14,535		14,535
財源		14,192		14,192
本年度差額		−343		−343
固定資産等の変動(内部変動)			−977	977
	有形固定資産等の増加		451	−451
	有形固定資産等の減少		1,485	−1,485
	貸付金・基金等の増加		1,268	−1,268
	貸付金・基金等の減少		1,211	−1,211
資産評価差額		−0	−0	
無償所管換等		416	416	
その他		−13		
本年度純資産変動額		61		
前年度末純資産残高		25,505		
本年度末純資産残高		25,566	41,568	−16,002

（注）1年間の行政コストと財源等の収支尻を表す「本年度末純資産残高」は、下記の貸借対照表の純資産の部に計上されます。

（単位：百万円）

【貸借対照表＝BS】				
資産の部			負債・純資産の部	
(1)固定資産		40,800	(1)固定負債	15,683
	有形固定資産	38,350	(2)流動負債	1,710
	無形固定資産	8	負債の部合計	17,393
	投資その他の資産	2,441	固定資産等形成分	41,568
(2)流動資産		2,159	余剰分（不足分）	−16,002
	現金預金	1,303		
	その他	856	純資産の部合計	25,566
資産の部合計		42,959	負債・純資産の部合計	42,959

（注）貸借対照表の純資産の部の「固定資産等形成分」の計算

① 開始時の「純資産の部合計」の計算

➡「資産の部合計」―「負債の部合計」・・・・差額である

② NWの本年度末残高と照合する、BS残高の算出方法

➡(固定資産合計−長期延滞債権+固定徴収不能引当金+投資損失引当金)+（短期貸付金+流動基金）

（注）「長期延滞債権」とは収入未済の滞納繰越分であり、その歳入金額は「余剰分」に含まれて「固定資産等形成分」に含まれないので、その算出から除外する。

③ 余剰分（不足分）の計算

➡「純資産の部合計」―「固定資産等形成分」・・・・・差額である

Ⅳ 分析比率

１．社会資本形成の世代間比率〔地方債等／（事業用資産＋インフラ資産＋物品）〕

・社会資本の整備の結果を示す事業用資産とインフラ資産と物品を地方債等などによってどれくらい調達したかを表します。
この指標が高いほど将来の世代が負担する割合が高いことを表します。

	令和４年度	令和３年度	比較増減
一般会計等	39.0%	39.7%	-0.7%
全　体	39.2%	40.4%	-1.2%
連　結	40.1%	41.3%	-1.1%

２．純資産比率〔純資産／総資産〕

・企業会計でいう「自己資本比率」に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。
総資産のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。

	令和４年度	令和３年度	比較増減
一般会計等	59.5%	58.7%	0.8%
全　体	50.3%	49.6%	0.7%
連　結	49.5%	49.1%	0.4%

３．有形固定資産減価償却率 〔減価償却累計額÷(有形固定資産－土地等＋減価償却累計額)〕

・有形固定資産が耐用年数に対して、資産の取得からどの程度経過しているのかを全体として把握することができます。

	令和４年度	令和３年度	比較増減
一般会計等	58.7%	57.1%	1.6%
全　体	52.2%	50.7%	1.5%
連　結	53.2%	52.5%	0.7%

４．受益者負担比率 〔経常収益÷経常費用〕

・行政コスト計算書の経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額ですので、これを経常費用と比較することにより、行政サービスの提供に対する受益者負担の割合を算出することができます。

	令和４年度	令和３年度	比較増減
一般会計等	2.8%	2.4%	0.4%
全　体	6.8%	6.8%	0.0%
連　結	10.8%	11.1%	-0.3%

Ⅴ　財務書類からわかること

（1）比較分析のための前提条件

（注1）　統一的な基準で財務書類を作成している他の5団体（可能な限り同規模）と比較し、分析比率を算出する。

（注2）　他団体数値は、前年度公表データから引用しているが、空欄は未公表部分である。

（注3）　四捨五入をしたため一致しない部分があります。

・ 分析比率算定のための基礎データ

	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民数：人数	29,703	80,112	28,889	25,600	33,756	47,777
面積：K㎡	160.52	548.51	240.93	214.67	222.85	206.94
可住地面積：K㎡	64.92	133.29	78.58	79.08	96.34	75.12
職員数	282	990	316	288	273	384
財政力指数	0.47	0.58	0.48	0.44	0.52	0.65
経常収支比率	93.1	87.1	90.6	84.0	87.0	84.0
実質公債費比率	12.2	7.8	6.8	10.9	7.1	7.5
将来負担比率	122.5	47.8	43.9	225.0	19.3	7.6
特記事項						

（2）貸借対照表から見える将来の負担

本年3月末時点の財政状態を、「どれだけ資産を持っているのか。」または、「将来負担がどれだけ残っているのか。」、どちらの視点で見るのか？　ここでは、後者の将来のリスクの観点から見ます。

住民サービスに供されている資産総額のうち、「将来の負担」が、どの程度あるのか？
➡本年度末の資産総額に占める負債総額の割合は、40.5%となっている。

（a）経年比較　　（単位：百万円）

区分	項目	28	29	30	R1	R2	R3	R4
資産合計	一般会計等	48,007	47,187	46,502	45,451	44,505	43,448	42,959
	全体会計	72,363	71,468	70,709	69,104	68,126	66,951	66,497
	連結会計	75,694	74,627	73,983	72,709	71,798	72,650	70,761
負債合計	一般会計等	18,653	18,185	18,059	17,820	17,612	17,943	17,393
	全体会計	36,880	36,237	35,581	34,485	33,747	33,748	33,072
	連結会計	39,576	38,672	37,938	37,187	36,366	36,981	35,713
負債の割合	一般会計等	38.9%	38.5%	38.8%	39.2%	39.6%	41.3%	40.5%
	全体会計	51.0%	50.7%	50.3%	49.9%	49.5%	50.4%	49.7%
	連結会計	52.3%	51.8%	51.3%	51.1%	50.7%	50.9%	50.5%

（b）他団体比較　　（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
資産合計	一般会計等	42,959	126,107	50,490	38,616	63,319	64,286
	全体会計	66,497	185,608	73,885	61,417	86,096	102,251
	連結会計	70,761	193,740	77,188	68,982	92,345	107,642
負債合計	一般会計等	17,393	45,269	17,728	26,357	20,144	23,369
	全体会計	33,072	83,529	32,929	41,906	35,926	45,152
	連結会計	35,713	88,084	34,834	46,282	36,835	47,600
負債の割合	一般会計等	40.5%	35.9%	35.1%	68.3%	31.8%	36.4%
	全体会計	49.7%	45.0%	44.6%	68.2%	41.7%	44.2%
	連結会計	50.5%	45.5%	45.1%	67.1%	39.9%	44.2%

（3） 実質債務（地方債等と現金預金）の状況

住民一人当たり実質債務で「将来の負担」をみる場合、他団体と比較してみると？

➡本年度末では、10,709百万円あるが、住民一人当たりの実質債務は、360,528円である。

（a）経年推移

★一般会計等の実質債務

（単位：百万円）

区分	項目	28	29	30	R1	R2	R3	R4
借金	地方債等	14,788	14,385	14,301	14,074	13,804	14,108	13,571
	1年以内償還予定地方債等	1,252	1,256	1,250	1,266	1,287	1,357	1,383
	合計	16,040	15,641	15,552	15,340	15,091	15,465	14,954
貯金	固定基金	1,013	1,325	1,252	1,642	2,105	2,172	2,109
	現金預金	798	999	1,124	1,063	840	1,222	1,303
	財政調整基金等	1,574	1,226	1,114	878	672	712	833
	合計	3,385	3,550	3,491	3,583	3,618	4,105	4,246
	差引	12,655	12,091	12,061	11,757	11,473	11,360	10,709

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	24,812	23,912	23,358	22,656	21,903	21,695	20,760
	1年以内償還予定地方債等	2,102	2,082	2,061	2,052	2,090	2,163	2,161
	合計	26,914	25,994	25,418	24,709	23,993	23,859	22,921
貯金	固定基金	1,494	1,852	1,824	2,281	2,823	3,023	3,032
	現金預金	2,065	2,388	2,664	2,293	2,171	2,573	2,647
	財政調整基金等	1,574	1,226	1,114	878	672	712	833
	合計	5,134	5,466	5,602	5,452	5,666	6,308	6,513
	差引	21,781	20,527	19,816	19,257	18,327	17,551	16,408

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	26,400	25,514	24,879	24,464	23,629	23,981	22,478
	1年以内償還予定地方債等	2,649	2,315	2,316	2,311	2,308	2,434	2,405
	合計	29,049	27,829	27,196	26,775	25,937	26,415	24,884
貯金	固定基金	1,827	2,220	2,216	2,626	3,181	3,444	3,382
	現金預金	2,360	2,515	2,802	2,431	2,312	2,813	2,922
	財政調整基金等	1,574	1,226	1,114	878	672	712	833
	合計	5,761	5,961	6,132	5,935	6,165	6,968	7,137
	差引	23,287	21,868	21,064	20,840	19,772	19,447	17,746

(b)他団体比較

★一般会計等の実質債務

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
借金	地方債等	13,571	36,623	13,773	21,831	15,773	18,603
	1年以内償還予定地方債等	1,383	3,526	1,148	1,281	1,434	1,936
	合計	14,954	40,149	14,921	23,112	17,207	20,539
貯金	固定基金	2,109	6,469	1,675	1,044	3,613	3,113
	現金預金	1,303	1,534	1,032	787	1,335	1,269
	財政調整基金等	833	1,958	1,957	1,126	1,724	3,306
	合計	4,246	9,961	4,664	2,957	6,672	7,688
差引		10,709	30,188	10,257	20,155	10,535	12,851

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	20,760	52,511	22,216	29,776	22,085	27,389
	1年以内償還予定地方債等	2,161	5,152	1,721	2,234	2,282	2,595
	合計	22,921	57,663	23,937	32,010	24,367	29,984
貯金	固定基金	3,032	8,625	3,205	1,267	4,616	3,938
	現金預金	2,647	4,216	2,269	2,164	3,261	5,465
	財政調整基金等	833	1,958	1,957	1,299	1,724	3,306
	合計	6,513	14,799	7,431	4,730	9,601	12,709
差引		16,408	42,864	16,506	27,280	14,766	17,275

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	22,478	54,873	23,910	32,594	22,233	28,685
	1年以内償還予定地方債等	2,405	5,983	1,825	2,596	2,482	2,772
	合計	24,884	60,856	25,735	35,190	24,715	31,457
貯金	固定基金	3,382	9,916	3,367	2,073	5,687	4,708
	現金預金	2,922	5,350	2,833	2,795	3,625	6,216
	財政調整基金等	833	1,959	1,958	1,299	1,737	3,307
	合計	7,137	17,225	8,158	6,167	11,049	14,231
差引		17,746	43,631	17,577	29,023	13,666	17,226

(c) 住民一人当たり実質債務（財政の健全化の指標）

（単位：円）

区分	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民一人当たり実質債務残高	一般会計等	360,528	376,822	355,049	787,305	312,093	268,979
	全体会計	552,411	535,051	571,359	1,065,625	437,433	361,576
	連結会計	597,464	544,625	608,432	1,133,711	404,847	360,550

（注）計算式＝実質債務（臨財債を含む）÷住民数

(d)臨時財政対策債の経年推移

決算統計33表58行近辺の2列目・4列目より

（単位：百万円）

区分	項目	28	29	30	R1	R2	R3	R4
臨時財政対策債	発行額	414	426	420	342	327	321	125
	元金償還額	327	360	393	425	453	479	494
	現在高	5,646	5,712	5,739	5,656	5,530	5,372	5,003

（単位：百万円）

区分	項目	28	29	30	R1	R2	R3	R4
臨財債控除後現在高	一般会計等	10,394	9,929	9,813	9,684	9,561	10,093	9,951
	全体会計	21,268	20,282	19,679	19,053	18,463	18,487	17,918
	連結会計	23,403	22,117	21,457	21,119	20,407	21,043	19,881

（4）純資産変動計算書の「本年度差額」の状況

貸借対照表のように過去から現在までの自治体の蓄積でなく、本年度の発生主義による数値を見ます。

①「本年度差額」は、民間企業の利益の計算式と同じですが、そういう観点に立った場合どうだったのか？

➡本年度の純行政コストと財源の差額である「本年度差額」は、一般会計等で−,343百万円である。

（a） 経年比較

NWMより　　（単位：百万円）

区分	項目	28	29	30	R1	R2	R3	R4
一般会計等	① 人件費	2,293	2,230	2,174	2,262	2,751	2,589	2,621
	② 物件費等	4,341	4,561	4,675	4,933	5,390	4,938	5,327
	③ その他の業務費用	223	200	184	189	205	219	194
	④ 移転費用	5,967	6,426	5,762	6,395	9,363	8,004	6,796
	経常収益	332	357	382	342	304	377	411
	臨時損失	67	8	21	22	0	1,475	14
	臨時利益	300	66	2	3	4	0	5
	純行政コスト	12,259	13,002	12,432	13,455	17,401	16,848	14,535
	① 税収等	9,404	9,377	9,114	9,602	9,647	10,364	10,263
	② 国県等補助金	2,993	3,274	2,718	2,987	7,078	5,067	3,929
	財源	12,397	12,651	11,832	12,589	16,725	15,432	14,192
	本年度差額	138	−351	−600	−866	−676	−1,417	−343
全体	① 人件費	2,555	2,673	2,418	2,486	2,987	2,849	2,871
	② 物件費等	5,647	5,897	6,004	6,251	6,717	6,277	6,675
	③ その他の業務費用	489	453	454	484	495	526	438
	④ 移転費用	11,624	11,939	10,884	11,611	14,369	13,104	11,954
	経常収益	1,471	1,479	1,551	1,593	1,544	1,553	1,490
	臨時損失	75	197	36	105	5	1,490	27
	臨時利益	300	78	2	3	4	4	31
	純行政コスト	18,619	19,602	18,243	19,340	23,024	22,690	20,443
	① 税収等	13,865	13,693	11,581	12,038	12,139	12,659	12,527
	② 国県等補助金	5,370	5,653	6,511	6,732	10,700	8,819	7,726
	財源	19,235	19,346	18,092	18,769	22,839	21,478	20,253
	本年度差額	616	−256	−151	−570	−185	−1,212	−190
連結	① 人件費	3,349	3,555	3,231	3,472	3,935	3,823	3,812
	② 物件費等	6,649	6,863	6,776	7,142	7,535	7,424	7,672
	③ その他の業務費用	525	493	493	531	544	582	490
	④ 移転費用	11,040	11,352	10,136	10,856	13,518	12,064	11,337
	経常収益	2,479	2,547	2,413	2,651	2,553	2,650	2,527
	臨時損失	94	208	46	120	36	1,508	61
	臨時利益	26	107	26	43	45	29	44
	純行政コスト	19,152	19,817	18,243	19,426	22,970	22,721	20,802
	① 税収等	14,085	13,917	11,609	12,190	12,182	13,069	12,935
	② 国県等補助金	5,399	5,668	6,602	6,798	10,703	8,874	7,791
	財源	19,484	19,585	18,211	18,987	22,885	21,943	20,726
	本年度差額	332	−232	−32	−439	−85	−778	−76
減価償却費	一般会計等	1,567	1,551	1,560	1,570	1,543	1,457	1,485
	全体会計	2,301	2,290	2,304	2,316	2,293	2,208	2,237
	連結会計	2,533	2,447	2,473	2,491	2,460	2,424	2,436

（注）民間企業では、「本年度差額」が「利益」に相当するのでプラスの必要があるが、公会計は利益目的ではない。

公会計の場合、減価償却費が計上されるので、ほとんどの自治体でマイナスになる。

➡プラスかマイナスかが重要でなく、その水準での経年推移の分析が、重要である。

(b) 自治体間比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	① 人件費	2,621	5,135	2,530	2,449	2,638	2,862
	② 物件費等	5,327	13,203	6,219	5,481	7,433	9,351
	③ その他の業務費用	194	416	172	161	188	174
	④ 移転費用	6,796	22,059	6,016	7,968	8,344	8,867
	経常収益	411	875	511	597	386	445
	臨時損失	14	10	9	28	310	0
	臨時利益	5	168	2	13	4	2
	純行政コスト	14,535	39,780	14,433	15,477	18,523	20,807
	① 税収等	10,263	24,893	11,497	10,770	12,959	15,212
	② 国県等補助金	3,929	13,476	3,953	4,950	5,866	5,918
	財源	14,192	38,369	15,450	15,720	18,825	21,130
	本年度差額	-343	-1,411	1,017	243	302	323
全体	① 人件費	2,871	10,422	2,691	2,615	2,764	3,154
	② 物件費等	6,675	19,529	7,982	6,772	9,172	11,325
	③ その他の業務費用	438	1,484	450	388	459	490
	④ 移転費用	11,954	33,925	12,021	12,443	14,369	16,410
	経常収益	1,490	10,643	1,721	1,612	1,914	2,334
	臨時損失	27	76	9	30	131	16
	臨時利益	31	204	242	15	4	8
	純行政コスト	20,443	54,589	21,190	20,621	24,977	29,053
	① 税収等	12,527	31,791	14,453	13,074	15,775	18,928
	② 国県等補助金	7,726	23,031	8,149	8,146	10,073	10,931
	財源	20,253	54,822	22,602	21,220	25,848	29,859
	本年度差額	-190	233	1,412	599	871	806
連結	① 人件費	3,812	11,930	3,121	4,631	3,473	5,009
	② 物件費等	7,672	27,845	8,579	9,055	9,840	12,970
	③ その他の業務費用	490	1,937	689	615	606	832
	④ 移転費用	11,337	40,645	15,531	13,034	16,427	19,724
	経常収益	2,527	18,808	2,259	4,519	1,901	4,757
	臨時損失	61	80	2	45	131	19
	臨時利益	44	206	243	81	4	10
	純行政コスト	20,802	63,423	25,420	22,780	28,572	33,787
	① 税収等	12,935	36,059	16,402	14,269	17,452	20,912
	② 国県等補助金	7,791	27,901	10,320	9,900	11,975	13,574
	財源	20,726	63,960	26,722	24,169	29,427	34,486
	本年度差額	-76	537	1,302	1,389	855	699
減価償却費	一般会計等	1,485	4,339	1,691	1,632	1,803	2,220
	全体会計	2,237	6,401	2,617	2,474	2,834	3,455
	連結会計	2,436	6,662	2,798	2,747	3,144	3,771
一般会計等	人件費÷純行政コスト	18.0%	12.9%	17.5%	15.8%	14.2%	13.8%
	物件費÷純行政コスト	36.6%	33.2%	43.1%	35.4%	40.1%	44.9%
	移転費用÷純行政コスト	46.8%	55.5%	41.7%	51.5%	45.0%	42.6%
	国県等補助金÷財源	27.7%	35.1%	25.6%	31.5%	31.2%	28.0%

（5）純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況

将来世代への投資は、魅力的な町造りのためには、必須のものであるが、将来世代に対する投資水準を表した純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況がどうだったのか？

➡将来世代のための投資水準の変動を表す「固定資産等の変動」は、-977百万円であり、有形固定資産の変動額は、-1,034百万円で、金融資産の変動額は、57百万円である。

しかし、少子高齢化を踏まえ、長期計画立案の上で投資を決定する必要がある。

（a） 経年比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	28	29	30	R1	R2	R3	R4
一般会計等	固定資産等の変動（内部変動）	-208	-1,024	-844	-955	-735	-1,606	-977
	有形固定資産等の増加	379	565	919	467	552	1,237	451
	有形固定資産等の減少	1,569	1,551	1,576	1,570	1,543	2,785	1,485
	貸付金・基金等の増加	1,255	718	943	1,159	1,213	1,234	1,268
	貸付金・基金等の減少	273	756	1,130	1,010	957	1,292	1,211
全体	固定資産等の変動（内部変動）	-516	-1,154	-1,060	-1,121	-861	-1,735	-961
	有形固定資産等の増加	950	1,217	1,464	1,012	1,138	1,738	1,159
	有形固定資産等の減少	2,429	2,379	2,381	2,350	2,332	3,550	2,248
	貸付金・基金等の増加	1,308	836	1,013	1,278	1,322	1,369	1,391
	貸付金・基金等の減少	345	828	1,156	1,061	988	1,292	1,263
連結	固定資産等の変動（内部変動）	-334	-1,020	-878	-796	-940	-1,384	-1,061
	有形固定資産等の増加	1,297	1,343	1,801	1,436	1,238	2,350	1,357
	有形固定資産等の減少	2,752	2,538	2,551	2,566	2,521	3,774	2,469
	貸付金・基金等の増加	1,328	877	1,039	1,269	1,338	1,400	1,336
	貸付金・基金等の減少	208	702	1,167	936	995	1,360	1,284

（b） 自治体間比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	固定資産等の変動（内部変動）	-977	717	-545	680	2,703	282
	有形固定資産等の増加	451	3,974	781	1,962	3,441	1,637
	有形固定資産等の減少	1,485	4,351	1,693	1,634	1,934	2,249
	貸付金・基金等の増加	1,268	5,599	1,262	2,232	2,167	2,674
	貸付金・基金等の減少	1,211	4,505	895	1,880	971	1,780
全体	固定資産等の変動（内部変動）	-961	2,111	-750	408	1,911	174
	有形固定資産等の増加	1,159	6,044	1,454	2,495	3,743	2,589
	有形固定資産等の減少	2,248	6,473	2,621	2,481	2,995	3,484
	貸付金・基金等の増加	1,391	7,270	1,357	2,286	1,992	2,874
	貸付金・基金等の減少	1,263	4,730	940	1,892	829	1,805
連結	固定資産等の変動（内部変動）	-1,061	2,441	-866	1,328	2,468	545
	有形固定資産等の増加	1,357	6,562	1,469	3,704	3,855	3,091
	有形固定資産等の減少	2,469	6,734	2,802	2,781	3,004	3,804
	貸付金・基金等の増加	1,336	7,513	1,445	2,370	2,486	3,174
	貸付金・基金等の減少	1,284	4,900	978	1,965	869	1,916

（6）資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支（プライマリーバランス）の状況

・基金への積み立てを、投資活動収支に含める（①）か、含めないか、二つの異なった健康診断がなされる。

業務活動収支と投資活動収支を合算した利払後基礎的財政収支が、ゼロ以上であれば、地方債に依存しない財政運営が行われたことになりますが、どうだったのか？

➡本年度の利払後基礎的財政収支は、587百万円であり、基金への積み立てを含めない場合は、644百万円です。

・なお、臨財債を借金と見ない場合の収支を一般会計についてのみ示した。

（a）経年比較

（単位：百万円）

区分	決算年度	28	29	30	R1	R2	R3	R4
一般会計等	業務活動収支	1,383	1,070	778	667	661	891	1,041
	投資活動収支	−1,263	−462	−642	−572	−499	−889	−454
	利払後基礎的財政収支（①）	120	608	136	94	163	2	587
	基金等増加（②）	982	−38	−187	149	255	−58	57
	基金除外後（①+②）	1,102	570	−50	243	418	−56	644
全体	業務活動収支	2,369	2,007	1,862	1,344	1,738	1,954	1,951
	投資活動収支	−1,554	−756	−1,089	−1,062	−1,008	−1,424	−944
	利払後基礎的財政収支（①）	815	1,251	773	282	730	530	1,008
	基金等増加（②）	963	8	−143	216	334	77	129
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,778	1,259	631	498	1,064	607	1,136
連結	業務活動収支	2,762	2,360	2,053	1,573	1,973	2,596	2,256
	投資活動収支	−1,888	−880	−1,344	−1,336	−1,082	−1,930	−1,110
	利払後基礎的財政収支（①）	874	1,481	709	237	891	666	1,146
	基金等増加（②）	1,120	175	−128	334	342	40	51
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,995	1,656	581	570	1,233	707	1,197

（単位：年）

区分	決算年度	28	29	30	R1	R2	R3	R4
地方債等償還可能年数	一般会計等	133	26	114	163	93	9,608	25
	全体会計	33	21	33	88	33	45	23
	連結会計	33	19	38	113	29	40	22

(b)他団体比較

（単位：百万円）

	区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	業務支出	13,490	36,499	13,236	14,422	16,533	18,921
	業務収入	14,545	37,024	15,656	15,383	18,469	21,374
	臨時支出	14	0	0	18	0	0
	臨時収入	0	0	32	19	0	0
	業務活動収支（現役世代収支）	1,041	525	2,452	962	1,936	2,453
	投資活動支出	1,718	9,421	2,825	4,173	6,238	4,448
	投資活動収入	1,265	6,600	1,947	2,668	2,375	2,126
	投資活動収支（将来世代収支）	-454	-2,821	-878	-1,505	-3,863	-2,322
	利払後基礎的財政収支（①）	587	-2,296	1,574	-543	-1,927	131
	基金等増加（②）	57	1,094	367	352	1,196	894
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	644	-1,202	1,941	-191	-731	1,025
全体	業務支出	19,507	58,462	20,538	19,644	23,625	27,659
	業務収入	21,475	62,524	23,767	21,632	26,318	31,506
	臨時支出	15	65	0	20	1	16
	臨時収入	-2	36	33	21	0	6
	業務活動収支（現役世代収支）	1,951	4,033	3,262	1,989	2,692	3,837
	投資活動支出	2,424	13,094	3,706	4,808	6,354	5,478
	投資活動収入	1,480	6,920	2,912	2,914	2,495	2,449
	投資活動収支（将来世代収支）	-944	-6,174	-794	-1,894	-3,859	-3,029
	利払後基礎的財政収支（①）	1,008	-2,141	2,468	95	-1,167	808
	基金等増加（②）	129	2,540	417	394	1,163	1,069
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,136	399	2,885	489	-4	1,877
連結	業務支出	20,667	75,199	25,001	24,383	27,159	34,284
	業務収入	22,941	79,789	28,419	27,359	29,925	38,608
	臨時支出	28	65	0	44	1	16
	臨時収入	10	36	33	37	27	6
	業務活動収支（現役世代収支）	2,256	4,561	3,451	2,969	2,792	4,314
	投資活動支出	2,627	13,313	3,921	6,148	6,689	6,334
	投資活動収入	1,517	6,552	2,953	3,249	2,549	2,651
	投資活動収支（将来世代収支）	-1,110	-6,761	-968	-2,899	-4,140	-3,683
	利払後基礎的財政収支（①）	1,146	-2,200	2,483	70	-1,348	631
	基金等増加（②）	51	2,613	467	405	1,617	1,258
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,197	413	2,950	475	269	1,889

・ 作成方法は、歳入歳出決算書の「款・節・細節」から繰越金・地方債発行・元金償還金を除外する。

・「基礎的財政収支」がゼロで成長率が利子率以上の場合、地方債残高は増えないとされている。
しかし、成長率が利子率以上という前提が成立しない場合には、利子償還金相当額、地方債残高は増加していくのである。

・ 財務省のHPでは、「財政収支」という言葉で表現されている。
「基礎的財政収支が均衡したとしても利払い費分だけ債務残高の実額は増加してしまうのである。これを止めるためには、利払い費を含む財政収支を均衡させる必要がある。この財政収支の均衡とは、新たに借金をする額と過去の借金を返す額が同額である状態を言う。」

★ 特徴

・ 当該年度で地方債を財源とする大きな普通建設事業があると、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。

・ 財政調整基金等の大きな貯金を行うと、投資活動支出に含まれるので、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。

(a) 地方債等償還可能年数を比較(財政の健全性の指標)

・利払後基礎的財政収支の数値がマイナスの場合は指標として意味を成しませんが、、プラスの場合、年度末の「地方債残高」から除して「地方債等償還可能年数」を算出できるので、自治体の現在の財政状態が示されます。

➡地方債等償還可能年数は、本年度、25年です。

・「地方債等償還可能年数」は、自治体の現在の財政状態を表す重要な指標である。

(単位:年)

指標	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
地方債等償還可能年数(注)	一般会計等	25	−17	9	−43	−9	157
	全体会計	23	−27	10	337	−21	37
	連結会計	22	−28	10	503	−18	50

(注)計算式=地方債等残高 ÷ 利払後基礎的財政収支

★ 特徴

・ 地方債等償還可能年数は、本年度の収支が続くと仮定して、地方債等残高がゼロになる必要年数である。

・ 他団体の連結の平均的な年数であるが、当事務所のデータによれば、住民数20万人台の自治体では、概ね20年から40年という数値の財政状態のところが多くなっている。

・ 住民数50万人以上の自治体では、利払後基礎的財政収支、地方債等償還可能年数がマイナスで、地方債残高が増えていくという状況のところが多くなっている。

(7)歳入歳出決算書の経年データ

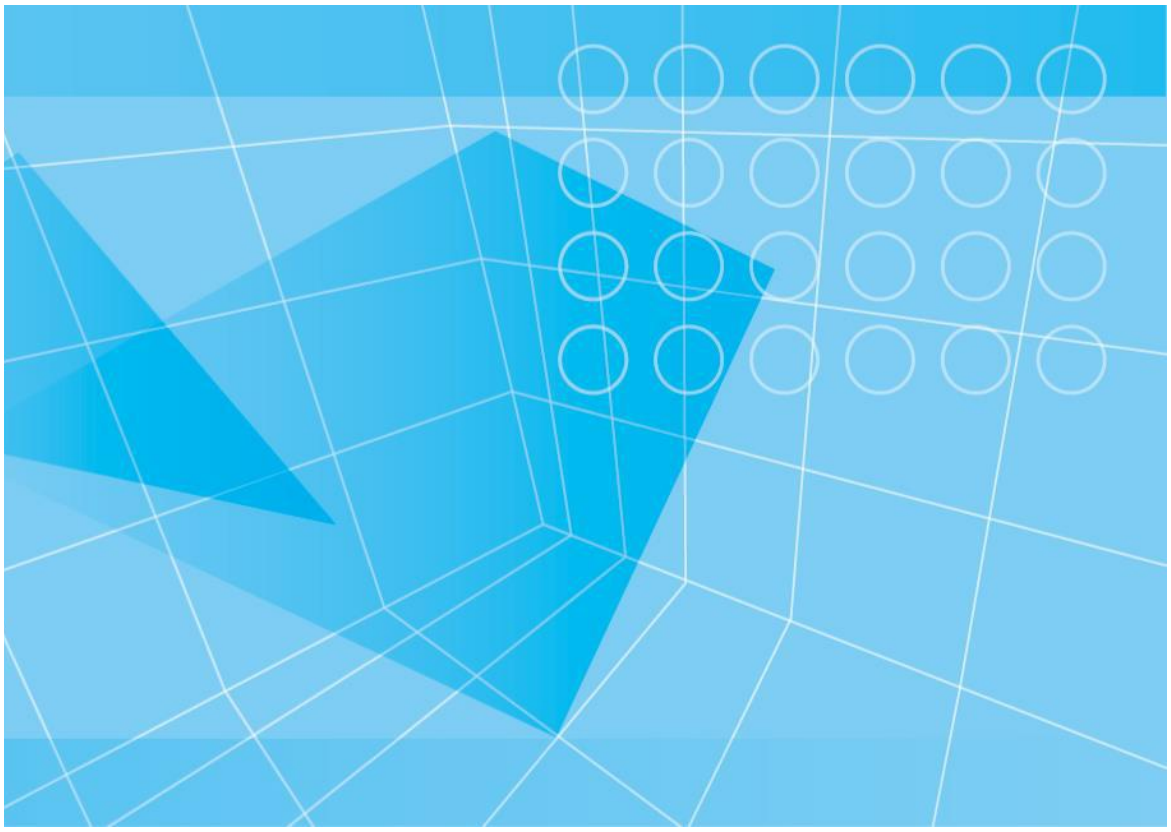
歳入歳出決算書より　　（単位：百万円）

款 or 節		28	29	30	R1	R2	R3	R4
予算現額		15,772	15,437	15,546	16,303	21,517	19,716	18,763
収入済額	市町村税	3,537	3,600	3,595	3,730	3,618	3,452	3,581
	地方消費税交付金	534	564	608	571	700	757	774
	地方交付税	4,427	4,266	4,135	4,087	4,163	4,823	4,694
	国庫支出金	1,719	1,636	1,686	1,955	5,847	3,801	2,705
	都道府県支出金	1,274	1,639	1,032	1,032	1,231	1,266	1,224
	その他の款	1,535	2,111	2,293	2,627	2,409	2,848	2,829
	小計(①)	13,026	13,816	13,349	14,002	17,968	16,947	15,807
	繰越金	1,118	762	968	956	963	818	1,195
	地方債発行	789	853	1,166	1,098	955	1,663	846
	合計(②)	14,933	15,431	15,483	16,056	19,886	19,428	17,848
予算現額と収入済額との比較(予算差異)		839	6	63	247	1,631	288	915
支出済額	委託料	1,663	1,918	1,814	1,758	2,054	2,193	2,082
	工事請負費	530	625	1,149	988	894	1,403	878
	負担金及び補助交付金	2,387	2,697	1,884	2,404	5,584	3,614	2,758
	扶助費	1,979	2,507	2,214	2,294	2,337	2,747	2,354
	繰出金	1,602	1,644	1,622	1,670	1,632	1,608	1,600
	その他の節	4,594	3,682	4,393	4,615	5,200	5,289	5,461
	小計(③)	12,755	13,073	13,076	13,729	17,701	16,854	15,133
	地方債費	1,416	1,391	1,382	1,364	1,367	1,379	1,445
	合計(④)	14,171	14,464	14,458	15,093	19,068	18,233	16,578
不用額		839	6	63	247	1,631	288	915
実質収支に関する調書より記入	歳入歳出差引額(②－④)	762	967	1,025	963	818	1,195	1,270
	翌年度へ繰越すべき財源	50	32	104	22	20	12	100
	実質収支額	712	935	921	941	798	1,183	1,170
	基金繰入額	0	0	0	0	0	0	0
	翌年度繰越金	712	935	921	941	798	1,183	1,170

財源内訳

決算統計13表より記入	国庫支出金	1,699	1,625	1,688	1,943	5,849	3,371	2,325
	都道府県支出金	1,274	1,638	1,029	1,027	1,228	1,160	1,166
	使用料手数料	149	163	152	137	95	96	105
	分担金負担金寄附金	194	207	206	156	897	117	98
	財産収入	15	16	15	12	20	14	13
	繰入金	83	55	288	149	929	464	473
	諸収入	147	133	126	150	213	168	186
	繰越金	0	0	0	0	969	0	0
	地方債	374	427	747	757	955	1,341	721
	一般財源等	10,224	10,188	10,198	10,750	8,722	11,490	11,478
	歳出合計	14,159	14,452	14,449	15,081	19,877	18,221	16,565

令和４年度
南陽市の財務書類
【分析編】



南陽市財政課

令和４年度決算に係る「統一的な基準による財務書類」について、以下の各表から抽出したデータを活用し、分析を行いました。

◆貸借対照表

貸借対照表は、基準日時点において、地方公共団体が住民サービスを提供するために、どれほどの資産や債務を有するかについて情報を示すものです。資産と財源となる負債及び純資産の合計は必ず一致します。負債は、将来世代の負担を意味し、純資産は、現在までの世代の負担ととらえます。

資産規模がどの程度あり（資産合計）、それに対する将来世代の負担（負債合計）が何％あるのか、また、一般会計等、全体会計、連結会計のそれぞれの区分ごとにどの程度あるのかを読み取ることができます。

◆行政コスト計算書

行政コスト計算書は、行政コストという経費明細という位置付けにあり、発生主義数値を含んだ現役世代に対する資源の配分の状況を示しています。行政コストの面では、人にかかるコストである人件費、物にかかるコストである物件費等、移転的な支出である移転費用等といった区分が設けてあります。

◆純資産変動計算書

貸借対照表の「純資産の部」に計上されている各数値が１年間でどのように変動したかを表している計算書です。

一会計期間に、税収と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのか、また、将来世代に対してどの程度資源配分したのか、つまり発生主義数値ではあるが住民から拠出された税収等が、どのように配分されたのかということを表しています。

◆資金収支計算書

資金収支計算書は、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」という表示区分を設けて収支状況を明示しています。

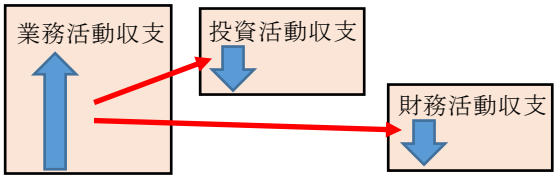
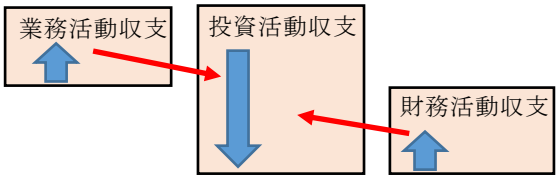
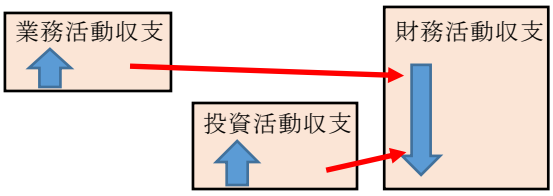
業務活動収支　：　地方公共団体の経営活動に伴い、継続的に発生する資金収支

投資活動収支　：　地方公共団体の将来世代に対する投資活動に伴い発生する資金収支

財務活動収支　：　地方公共団体の負債の管理に係る資金収支（負債の発行及び償還）

業務活動収支は税金と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのかを表します。業務活動収支と投資活動収支を合算して、プラスの場合借金が減少したことを意味し、マイナスの場合借金が増加したことを意味します。

３つの収支について、主なタイプの例示（赤色矢印の方向が資金の流れを示します。）

タイプ例	図解	汲み取ることのできる内容
健全タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆それでもなお余る資金は借金の返済（市債の償還）に充てる ◆公共資産への投資と借入金の返済を業務活動収支の範囲内により行っているため、健全といえる
積極投資タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆かつ、借金（市債の発行）をしてその資金を投資に充てている ◆業務活動収支の範囲を超えて（将来負担のリスクをとって）積極的に公共投資を行っている
債務圧縮タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆かつ、公共資産や出資を売却する等して得た資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆債務が減少しているため、将来リスクは減少しているが、必要な投資を行う余裕がない

連結対象とした会計の範囲

連　結

全　体

一般会計等[２会計]　一般会計、育英事業特別会計

特別会計[６会計]　水道事業会計、下水道事業会計、国民健康保険（事業勘定）特別会計、国民健康保険（直営診療勘定）特別会計、介護保険特別会計、後期高齢者医療特別会計

外郭団体[３会計]　置賜広域行政事務組合、置賜広域病院企業団
土地開発公社

◎財務書類分析の視点

総務省から示された以下の分析の視点を参考に分析を行いました。

【分析の視点】	【住民のニーズ】	【指　標】
資産形成度	将来世代に残る資産はどのくらいあるのか	◆住民一人当たり資産額 ◆有形固定資産の行政目的別割合 ◆歳入額対資産比率 ◆有形固定資産減価償却率 （資産老朽化比率）
世代間公平性	将来世代と現世代との負担の分担は適切か	◆純資産比率 ◆社会資本等形成の世代間負担比率 （将来世代負担比率） 【関係指標】　将来負担比率
持続可能性（健全性）	財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）	◆住民一人当たり負債額 ◆基礎的財政収支 ◆債務償還可能年数 【関係指標】　健全化判断比率
効　率　性	行政サービスは効率的に提供されているか	◆住民一人当たり行政コスト ◆性質別・行政目的別行政コスト
弾　力　性	資産形成を行う余裕はどのくらいあるか	◆行政コスト対税収等比率 【関係指標】　経常収支比率 実質公債費比率
自　律　性	歳入はどのくらい税金等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）	◆受益者負担の割合 【関係指標】　財政力指数

1 資産形成度　　将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるのか」といった住民の関心に基づくものです。

資産に関する情報は、歳入歳出決算書に添付される「財産に関する調書」においても、公有財産、物品、債権、及び基金の種別により記載されています。しかし、土地及び建物並びに山林は、地積や面積で測定され、動産も個数で表示されるなど、市が保有する資産の価値に関する情報を得ることができません。

貸借対照表（BS）は、資産の部において市の保有する資産のストック情報を一覧表示しており、これを「市民一人当たり資産額」や「有形固定資産の行政目的別割合」、「歳入額対資産比率」、「有形固定資産減価償却率」といった指標を用いてさらに分析することで新たな情報を得ることができます。

市民１人当たり資産額

資産総額 ／ 住民基本台帳人口

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	148.1万円	146.6万円	145.6万円	144.1万円	144.6万円
全体	225.2万円	222.9万円	222.9万円	222.1万円	223.9万円
連結	235.6万円	234.5万円	234.9万円	241.0万円	238.2万円

資産総額を住民基本台帳人口で除することにより、市民１人当たりの資産額を算出します。類似団体との比較に利用します。

平成30年から令和４年にかけて、一般、全体においてゆるやかな減少がみられます。これは、住民基本台帳人口が減少していますが、それを上回る割合で資産が減少していることを意味します。一般会計等における資産の減少要因としては、事業用資産の減少▲3,029百万円（H30：24,289百万円 → R4：21,260百万円）が挙げられます。令和４年には、道路、市民体育館・向山公園の照明設備、漆山小学校法面ユニットネットなどが新たに資産として計上されました。連結の令和３年からの資産の増額は、置賜広域行政事務組合の養護老人ホーム南陽やすらぎ荘などが新たに計上されたことによります。

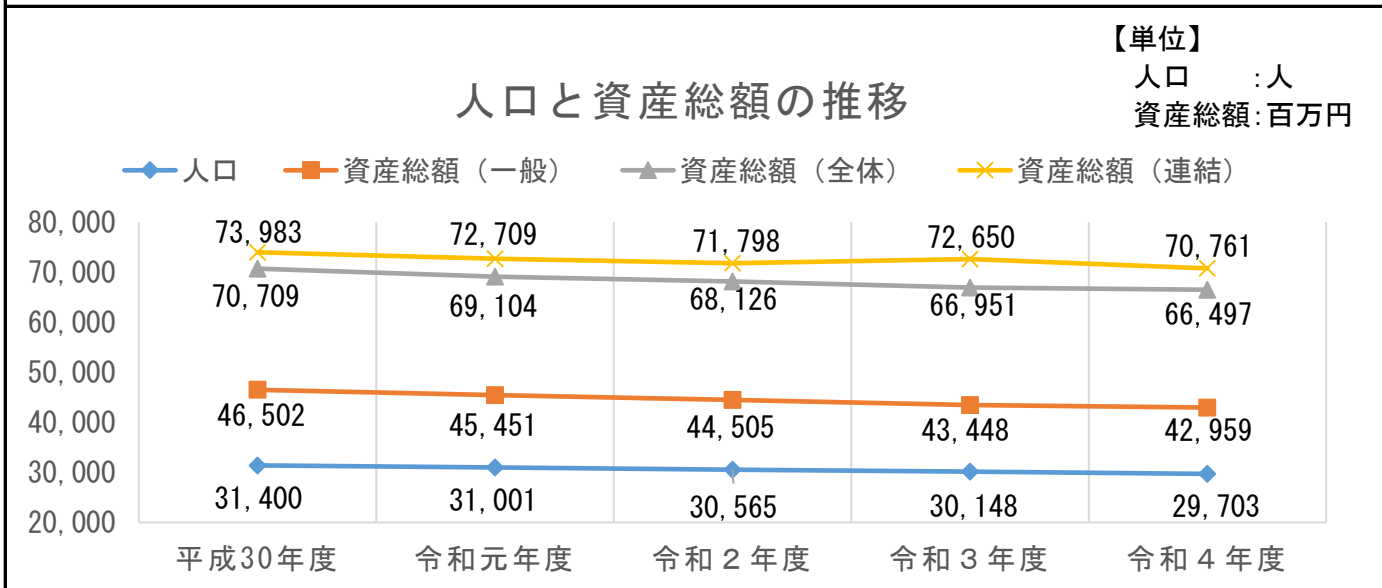
【資産総額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	46,502百万円	42,959百万円	▲3,054百万円
全体	70,709百万円	66,497百万円	▲4,212百万円
連結	73,983百万円	70,761百万円	▲3,222百万円

【住民基本台帳人口】

平成30年　31,400人　　R４年　29,703人　　（▲1,697人）

※一般的な値　：　100万円～300万円程度



歳入額対資産比率

$$\frac{\text{資産総額}}{\text{収入総額}}$$

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	3.2年	3.0年	2.4年	2.3年	2.6年
全体	3.2年	3.0年	2.6年	2.6年	2.8年
連結	3.1年	2.9年	2.6年	2.6年	2.7年

資金収支計算書の収入総額に対する資産総額の割合をいいます。これまでに形成された資産が収入の何年分に相当するかを表し、地方公共団体の資産形成の度合いを測ることができます。

平成30年から令和４年にかけて、一般、全体、連結とも減少しています。特に令和２年、令和３年が大きく減少していますが、これは、一般会計等において新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したことに伴い、業務収入のうち国県等補助金収入が大きく増加し、一時的に収入総額が増加したことによります。一般会計等においては、平成30年と比較すると資産総額は35億円の減、収入総額は21億円の増となっており、歳入額対資産比率は0.6ポイント減少しています。

南陽市は、一般的な団体の平均より低い数値となっています。この歳入額対資産比率が高ければ、社会資本の整備に重点を置いてきたことを表しますが、歳入規模に対して過度の社会資本整備を行っている場合などは、今後それらの維持のための負担が大きくなり、将来の財政運営を圧迫するおそれがあります。必ずしも高ければよいものではないことに留意する必要があります。

※一般的な値　：　3.0年～7.0年程度

有形固定資産減価償却率

$$\frac{\text{償却資産の減価償却累計額}}{\text{償却資産の取得価額等}}$$

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	52.1%	54.3%	56.2%	57.1%	58.7%
全体	45.8%	47.8%	49.7%	50.7%	52.2%
連結	47.3%	49.2%	50.4%	52.5%	53.2%

有形固定資産のうち償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合をいいます。

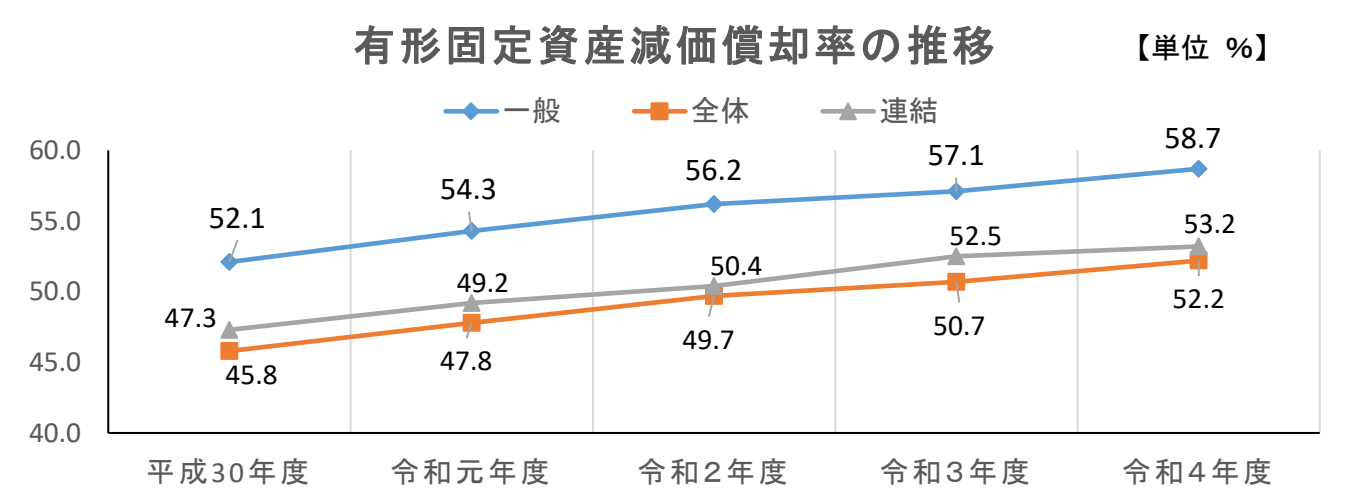
耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを表し、資産の老朽化のおおよその度合いを測ることができます。

一般的に数値が高いほど資産の老朽化が進んでいるといえます。本市においては公共施設を長く維持・活用し、トータルコストを抑えていくため、施設の長寿命化に取り組んでいます。そのため、この数値は今後も上昇していくことが予想されます。

平成30年から令和４年にかけて、一般6.6%、全体6.4%、連結5.9%それぞれ増加しています。これは、新たに取得した資産の額に比較して減価償却額が大きいことを示しています。

本市の有形固定資産減価償却率は、他団体と比較して極端に高い数値を示しているわけではありません。しかしながら、市の保有する４割以上の公共施設が築30年を経過するなど、全体としては施設の老朽化が進んでいる状況にあります。

※一般的な値　：　35%～50%程度



2 世代間公平性　　将来世代と現世代との負担の分担は適切か

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」といった住民の関心に基づくものです。これは、貸借対照表上の資産、負債及び純資産の対比によって明らかにされます。
世代間公平性を表す指標としては、地方財政健全化法における「将来負担比率」もありますが、貸借対照表により、財政運営の結果として、資産形成における将来世代と現世代までの負担のバランスが適切に保たれているのか、どのように推移しているのかを端的に把握することが可能となります。「純資産比率」や「社会資本等形成の世代間負担比率（将来世代負担比率）」が分析指標として挙げられます。

純資産比率

$$\frac{\text{純資産総額}}{\text{資産総額}}$$

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	61.2%	60.8%	60.4%	58.7%	59.5%
全体	49.7%	50.1%	50.5%	49.6%	50.3%
連結	48.7%	48.9%	49.3%	49.1%	49.5%

資産総額のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。
純資産の変動は、将来世代と現世代の間で負担の割合が変動したことを意味します。

企業会計でいう自己資本比率に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。
平成30年から令和４年にかけて、一般は1.7%の減、全体は0.6%の増、連結は0.8%の増となっています。一般会計等において数値の減少がみられるのは、純資産総額の減少幅が比較的大きいためで、理由としては、経常費用のうち、物件費などの「業務費用」や社会保障給付などの「移転費用」が増加傾向となっていることが挙げられます。令和３年は、旧ハイジアパーク南陽の売却などにより、数値が大きく減少しています。
なお、純資産は次の式において表すことができます。　純資産　＝　資産　－　負債

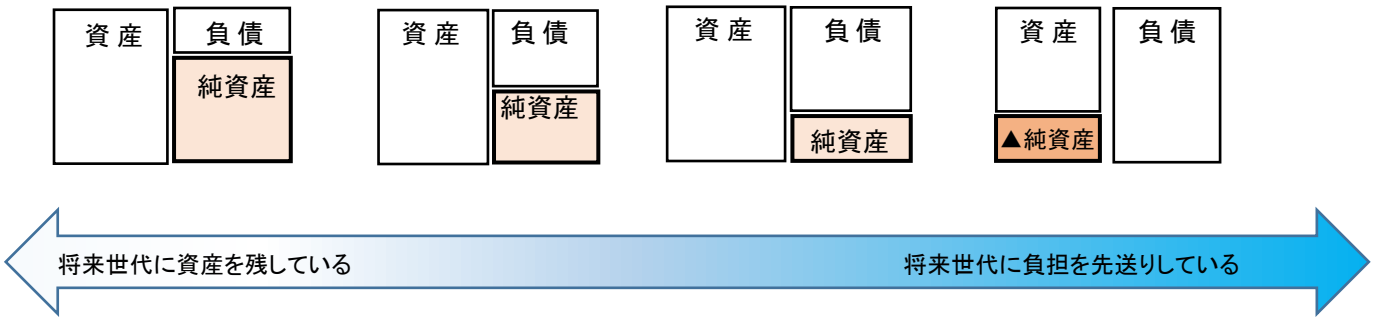
【資産総額】
前述のとおり

【純資産総額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	28,443百万円	25,566百万円	▲2,877百万円
全体	35,128百万円	33,425百万円	▲1,703百万円
連結	36,045百万円	35,048百万円	▲997百万円

純資産額の増加は、現世代が自らの負担によって将来世代も利用することができる資源を蓄積したことを表しています。反対に純資産の減少は、将来世代が利用することができた資源を現世代が消費して便益を受ける反面、将来世代に負担が先送りされたことを表します。
全体、連結の値が低いのは、水道事業及び下水道事業の仕組みが、将来の使用料収入で回収することを前提としていることや、地方債の償還年限が一般会計等よりも長いことが要因です。

※一般的な値　：　50%～90%程度



将来世代負担比率		平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
地方債＋１年内償還予定地方債 / 有形固定資産＋無形固定資産	一般	36.5%	37.0%	37.2%	39.7%	39.0%
	全体	39.5%	39.2%	38.8%	39.7%	38.6%
	連結	40.5%	40.5%	40.0%	40.7%	39.5%

社会資本等について地方債により形成した割合をいいます。数値が大きいほど社会資本等の形成に係る将来世代の負担の比重が大きくなります。

平成30年から令和４年にかけて、一般は2.5%増加しましたが、全体は0.9%、連結は1.0%それぞれ減少しています。これは、全体、連結会計において、長期的に見て、将来世代の負担が減少傾向にあることを表しています。数値が減少した主な要因は、地方債の減少です。

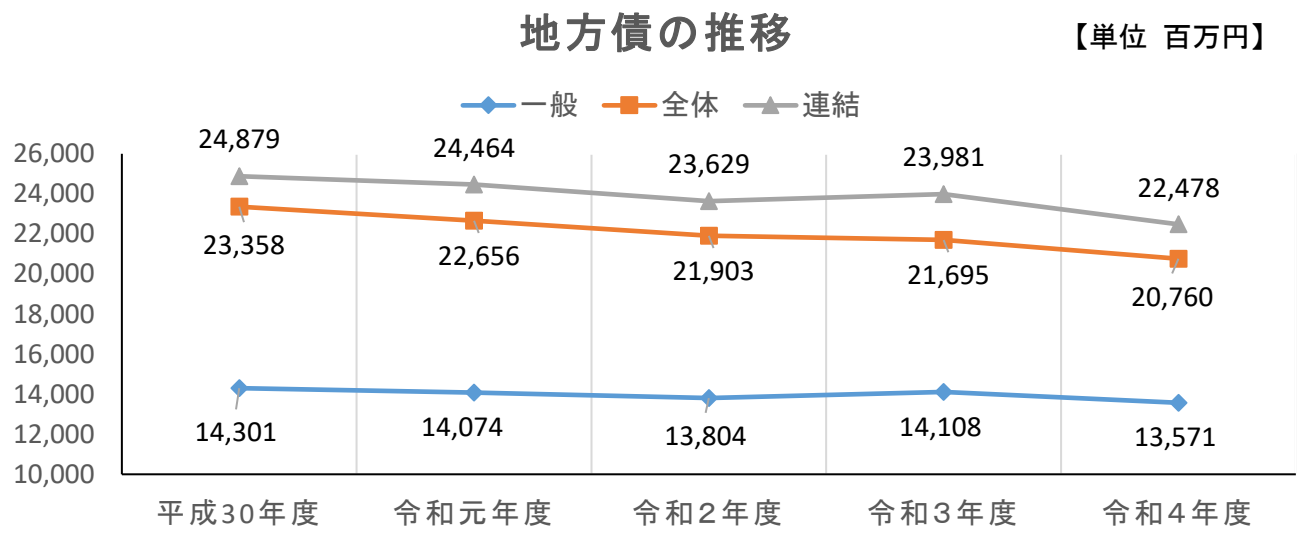
令和４年一般会計等においては、道路整備事業のほか、庁舎省エネルギー設備等導入改修事業、宮内地区地域交流センター整備事業などで、新たに8.5億円の地方債を発行しています。

地方債の発行には後年度の財政負担を伴いますが、「歳入・歳出の年度間調整」や「世代間公平のための調整」といった調整機能が備わるため、適切に発行されれば安定的な行政サービスの提供に大きく役立つものとされています。これからも本市の現状を正確に把握し、適正な発行額となるよう努めていきます。

【地方債の額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	14,301百万円	13,571百万円	▲730百万円
全体	23,358百万円	20,760百万円	▲2,598百万円
連結	24,879百万円	22,478百万円	▲2,401百万円

※一般的な値　：　10%～40%程度



（注）上のグラフは「１年内償還予定地方債」を除いた地方債の推移を表しています。

3 持続可能性（健全性）　　財政に持続可能性があるか

持続可能性（健全性）は、「財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）」という住民の関心に基づくものであり、財政運営に関する本質的な視点といえます。これに対しては、第一に、地方財政健全化法の「健全化判断比率」（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率及び将来負担比率）による分析が行われますが、これに加えて財務書類も有用な情報を提供することができます。

市の負債に関する情報については、現行の「予算に関する説明書」においても、債務負担行為額及び地方債現在高についてそれぞれ調書が添付されていますが、貸借対照表においては、このほかに退職手当引当金や未払金など、発生主義により全ての負債を捉えることが可能となります。

財政の持続可能性に関する指標としては、「市民一人当たり負債額」、「基礎的財政収支（プライマリーバランス）」、「債務償還可能年数」があります。

市民１人当たり負債額

負債総額 ／ 住民基本台帳人口

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	57.5万円	57.5万円	57.6万円	59.5万円	58.6万円
全体	113.3万円	111.2万円	110.4万円	111.9万円	111.3万円
連結	120.8万円	120.0万円	119.0万円	122.7万円	120.2万円

人口１人当たりの負債総額をいいます。類似団体との比較に利用します。

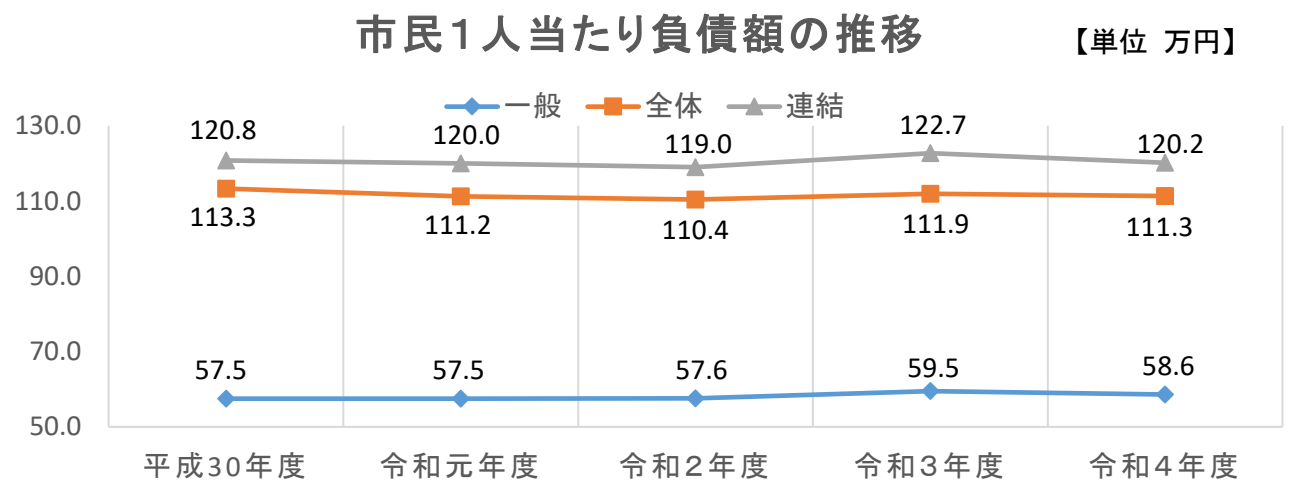
平成30年から令和４年にかけて、一般は1.1万円の増、全体は2.0万円の減、連結は0.6万円の減となっています。これは、一般会計等においては、負債のうち地方債（地方債と１年内償還予定地方債の合計額）が減少しているものの、それ以上に人口が減少したことによります。令和４年一般会計等においては、市債発行額8.5億円に対し、元金償還額13.6億円となっており、前年度と比較すると 市債残高が5.1億円減少しています。（財務活動収支▲5.1億円）

【地方債の額】
前述のとおり

【１年内償還予定地方債の額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	1,250百万円	1,383百万円	133百万円
全体	2,061百万円	2,161百万円	100百万円
連結	2,316百万円	2,405百万円	89百万円

※一般的な値　：　30万円～100万円程度



基礎的財政収支（プライマリーバランス）		平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
業務活動収支－支払利息支出(▲)＋投資活動収支	一般	2.6億円	2.1億円	2.6億円	0.9億円	6.8億円
	全体	10.7億円	5.5億円	9.7億円	7.5億円	12.1億円
	連結	10.3億円	5.2億円	11.6億円	9.0億円	13.6億円

支払利息支出を除く業務活動収支及び投資活動収支の合計額をいいます。
地方債等の元利償還額を除いた歳出と地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表します。

各年度ともにプラスの数値を確保しており、公債費に依存しない財政運営が行われたことを示しています。

この数値が均衡（０に近い。）している場合には、経済成長率が長期金利を下回らない限り経済規模に対する地方債の比率は増加せず、持続可能な財政運営であるといえます。反対にこの数値が大きくマイナスになると、その年の経費が市債に依存しないと賄えなかったことを意味し、そのままの財政運営を継続していくことは困難になります。

債務償還可能年数		平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
地方債＋１年内償還予定地方債 / 業務収入－ 業務支出	一般	19.9年	22.6年	22.8年	14.8年	14.2年
	全体	13.6年	17.5年	13.8年	11.3年	11.7年
	連結	13.3年	16.6年	13.3年	9.7年	10.9年

業務活動収支（臨時収支を除く。）に対する地方債残高の割合をいいます。
地方債の償還に要する年数を表し、年数が短いほど債務償還能力があるといえます。

平成30年から令和４年にかけて、一般、全体、連結ともそれぞれ減少しています。令和４年一般会計等においては、平成30年と比較し5.7ポイント数値が減少していますが、これは分子である「地方債残高（地方債と１年内償還予定地方債の合計額）」が6億円（155.5億円→149.5億円）減少し、分母である「業務活動収支（臨時収支を除く）」が2.7億円（7.8億円→10.5億円）増加したことによります。業務収入のうち、数値が増加した項目は以下の項目です。

税収等収入　　：　1,132百万円（9,123百万円→10,255百万円）
国県等補助金収入　：　1,250百万円（2,630百万円→ 3,880百万円）

債務償還可能年数は、償還財源上限額を全て債務の償還に充当した場合に、何年で現在の債務を償還できるかを表す理論値です。債務の償還原資を経常的な業務活動からどれだけ確保できているかということは、債務償還能力を把握する上で重要な視点のひとつといえます。

※一般的な値　：　3年～9年程度

（注）「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい　においては、債務償還可能年数の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】　（将来負担額 － 充当可能基金残高）÷（業務収入等 － 業務支出）

4 効率性　　行政サービスは効率的に提供されているか

効率性は、「行政サービスは効率的に提供されているか」という住民の関心に基づくものです。地方自治法においても、第２条第１４項において「地方公共団体は、その事務を処理するに当たっては、住民の福祉の増進に努めるとともに、最小の経費で最大の効果を挙げるようにしなければならない」とされています。財政の持続可能性と並んで住民の関心が高い視点といえます。

行政の効率性を表す「行政コスト計算書」は、市の行政活動に係る人件費や物件費等の費用を発生主義に基づきフルコストとして表示するものであり、行政の効率化を目指す際に不可欠な情報を一括して提供するものとなっています。

行政コスト計算書においては、「住民一人当たり行政コスト」を用いることにより、効率性の度合いを定量的に測定することが可能となります。

住民１人当たり行政ｺｽﾄ

純行政コスト
住民基本台帳人口

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	39.6万円	43.4万円	56.9万円	55.9万円	48.9万円
全体	58.1万円	62.4万円	75.3万円	75.3万円	68.8万円
連結	58.1万円	62.7万円	75.2万円	75.4万円	70.0万円

住民１人当たりの行政コストをいいます。
類似団体との比較に利用することで、地方公共団体の行政活動の効率性を比較することができます。

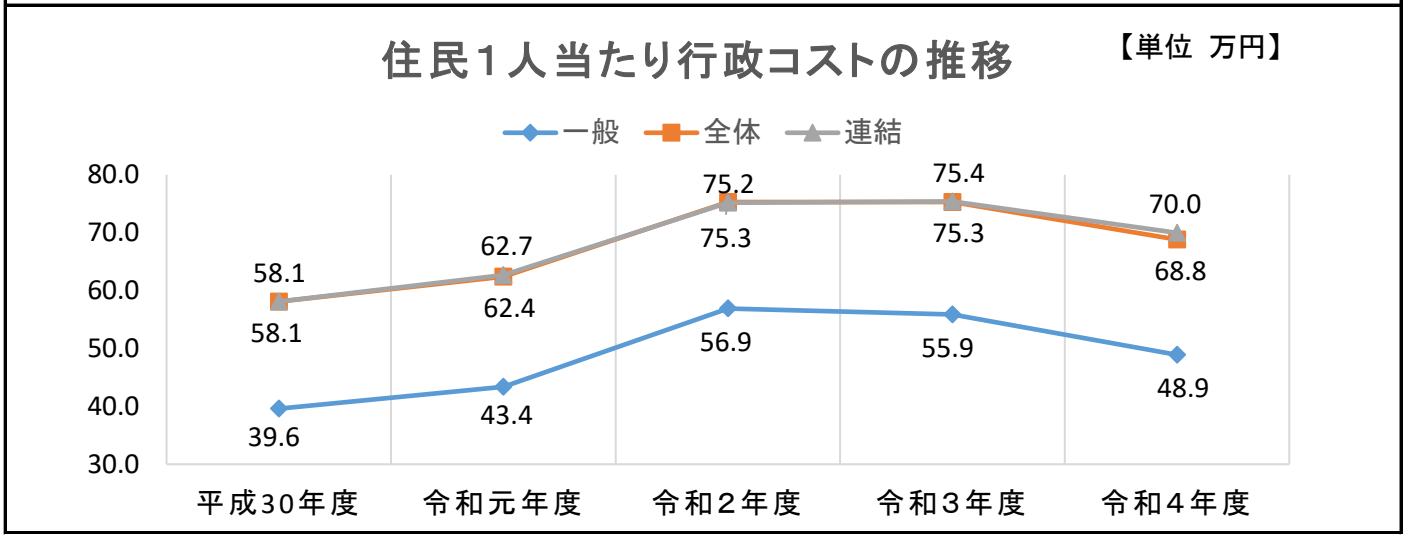
平成30年から令和４年にかけて、一般は9.3万円、全体は10.7万円、連結は11.9万円増加しています。これは、純行政コストの増加と住民基本台帳人口の減少によるものです。純行政コストが増加した主な理由は、経常費用のうち「業務費用」に含まれる「物件費」や、「移転費用」に含まれる「補助金等」と「社会保障給付」が増加したことによります。

【純行政コストの額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	12,432百万円	14,535百万円	2,103百万円
全体	18,243百万円	20,443百万円	2,200百万円
連結	18,243百万円	20,802百万円	2,559百万円

令和２年以降、数値が大きく上昇していますが、これは一般会計等において、新型コロナウイルス感染症対策事業や物価高騰対策事業を実施したためです。令和４年度は、全市民応援クーポン事業をはじめとする「緊急経済対策事業」、「子育て世帯への臨時特別給付金給付事業」、「電力・ガス・食料品等価格高騰緊急支援給付金給付事業」などを実施しました。

※　住民１人当たり行政コストについては、地方公共団体の人口や面積、行政権能等により異なります。一概に他団体との比較を行うことは適切ではないため、比較する際には類似団体で行うこととされています。



5 弾力性　　資産形成を行う余裕はどのくらいあるか

弾力性は「資産形成等を行う余裕はどのくらいあるか」といった住民の関心に基づくものです。
財政の弾力性については、一般に、「経常収支比率」等が用いられますが、財務書類においても弾力性の分析が可能となっています。「純資産変動計算書」において、市の資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているか「行政コスト対税収等比率」を示すことができます。
これは、市がインフラ資産の形成や施設の建設といった資産形成を行う財源的余裕度がどれだけあるかを示しています。

行政コスト対税収等比率

純経常行政コスト / 財源

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	104.9%	106.7%	104.1%	99.6%	102.4%
全体	100.6%	102.5%	100.8%	98.7%	101.0%
連結	100.1%	101.9%	100.4%	96.8%	100.3%

資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているかを示します。

平成30年から令和４年にかけて、一般は2.5%の減少、全体は0.4%、連結は0.2%それぞれ増加しています。令和４年一般会計等においては、令和３年と比較すると純経常行政コストは8.5億円の減、財源は12.4億円の減となっており、数値は2.8ポイント増加しています。この比率が100%に近づくほど資産形成の余裕度が低いといえ、さらに100%を上回ると、過去に蓄積した資産（基金など）が取り崩されたことを表します。

基金取崩収入(令和４年一般会計等)　：　1,167百万円
基金積立金支出(令和４年一般会計等)：　1,226百万円

【純経常行政コストの額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	12,413百万円	14,526百万円	2,113百万円
全体	18,209百万円	20,447百万円	2,238百万円
連結	18,223百万円	20,784百万円	2,561百万円

【財源の額】

	H30	R４	H30～R４増減額
一般	11,832百万円	14,192百万円	2,360百万円
全体	18,093百万円	20,253百万円	2,160百万円
連結	18,211百万円	20,726百万円	2,515百万円

※平均的な値：９０%～１１０%程度

6 自律性　　行政コストに対する受益者の負担はどのくらいあるか

自立性は「歳入はどのくらい税収等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）」といった住民の関心に基づいています。

これは市の財政構造の自律性に関するものであり、決算統計における「歳入内訳」や「財政力指数」が関連しますが、財務書類についても、「行政コスト計算書」において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

受益者負担の割合

$$\frac{\text{経常収益}}{\text{経常費用}}$$

	平成30年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
一般	3.0%	2.5%	1.7%	2.4%	2.8%
全体	7.9%	7.7%	6.3%	6.8%	6.8%
連結	11.7%	12.1%	10.0%	11.1%	10.8%

経常費用に対する使用料及び手数料を主とする経常収益の割合をいいます。
受益者が負担しない部分については、税、地方交付税及び補助金等により賄われます。

平成30年から令和４年にかけて、一般、全体、連結とも減少しています。令和２年で大きく数値が減少しているのは、一般会計等において前述の新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したことにより経常費用が増加したためです。令和３年からは反対に経常費用が減少していることにより、数値が上昇に転じています。

一般的に病院、ガス、上下水道事業を行う地方公共団体は、受益者負担比率の数値が高くなる傾向があります。

【経常収益の額】

	H30	R元	R２	R３	R４
一般	382百万円	342百万円	304百万円	377百万円	411百万円
全体	1,551百万円	1,593百万円	1,544百万円	1,553百万円	1,490百万円
連結	2,413百万円	2,651百万円	2,553百万円	2,650百万円	2,527百万円

【経常費用の額】

	H30	R元	R２	R３	R４
一般	12,795百万円	13,779百万円	17,710百万円	15,750百万円	14,938百万円
全体	19,759百万円	20,831百万円	24,568百万円	22,756百万円	21,937百万円
連結	20,636百万円	22,001百万円	25,532百万円	23,892百万円	23,312百万円

※平均的な値：２％～８％程度

（注）「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい　においては、受益者負担の割合の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】　使用料及び手数料　÷　純経常行政コスト

【参考資料】　「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」
落合幸隆著　（株）ぎょうせい

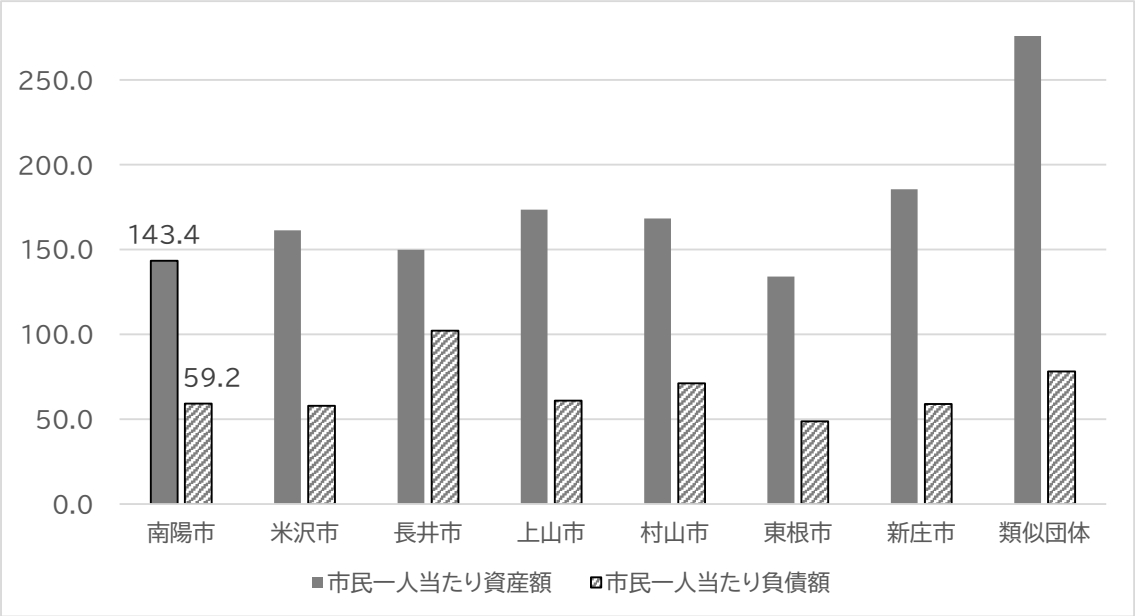
【参考資料】

主要指標の県内自治体との比較 （令和3年度決算：一般会計等）

南陽市の現状について県内の近隣及び同規模自治体と比較してみました。

（総務省：令和3年度　統一的な基準による財務書類に関する情報より）　※比較可能な最新値

◆市民一人当たりの資産と負債



（単位：万円）

	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
市民一人当たり資産額	143.4	161.4	149.8	173.6	168.3	134.1	185.5	275.8
市民一人当たり負債額	59.2	57.9	102.2	60.9	71.1	48.7	59.0	78.1

人口	30,295	78,118	25,786	29,092	22,652	47,950	34,127

人口は令和4年1月1日現在

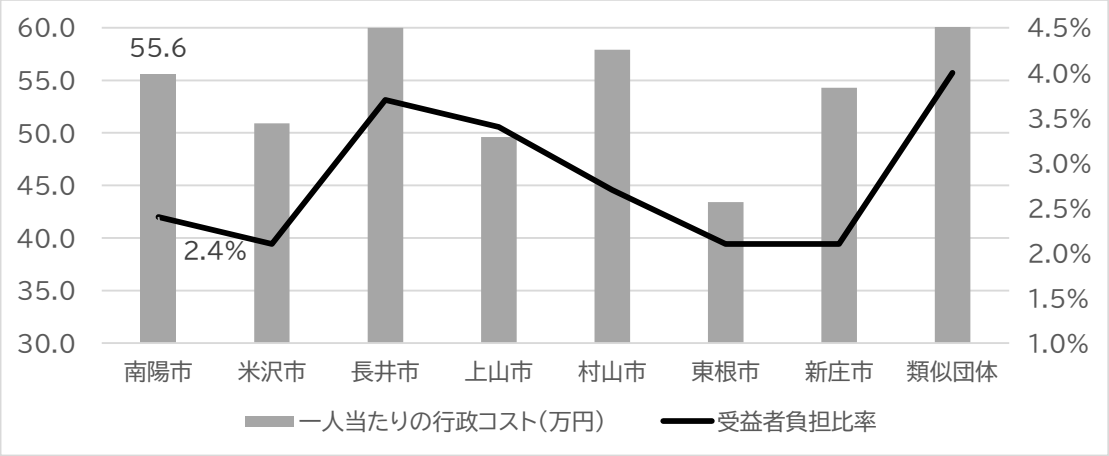
過去に取得した建物等の事業用資産の減価償却が進み、資産は減少傾向にあります。

負債については、地方債残高が減少していますが人口減少の影響もあり横ばいとなっています。

人口規模が小さい自治体ほど、人口増減の影響が数値に大きく反映されます。

＊類似団体
＝人口、産業構造の組み合わせで分類し、そのなかで標準的な運営をしている自治体の平均値をとったもの。

◆行政コストと受益者負担率

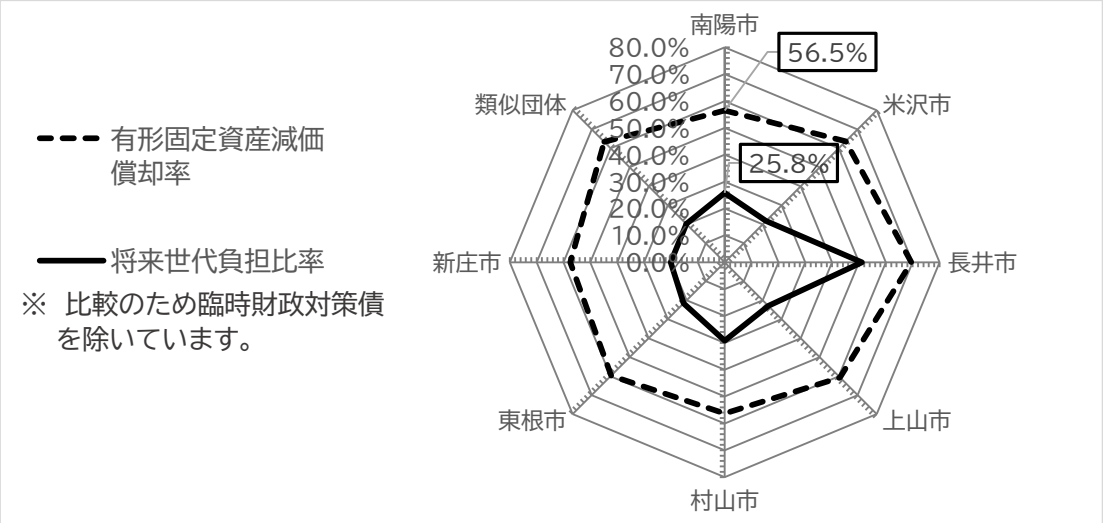


	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
一人当たりの行政コスト（万円）	55.6	50.9	60.0	49.6	57.9	43.4	54.3	62.9
受益者負担比率	2.4%	2.1%	3.7%	3.4%	2.7%	2.1%	2.1%	4.0%

南陽市の一人当たりの行政コスト、受益者負担率は、他と比較してもコストは高めで、負担は低い傾向にあります。

なお、令和2年度、3年度は新型コロナウイルス感染症にかかる各種給付事業などがあり行政コストは大きく増加し、受益者負担比率はコロナ交付金など国庫財源により減少しています。

◆施設の老朽化率と将来世代への負担



	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
有形固定資産減価償却率	56.5%	63.7%	69.5%	60.7%	56.3%	59.8%	57.5%	63.4%
将来世代負担比率	25.8%	21.8%	51.1%	23.0%	29.2%	21.6%	20.1%	20.2%

有形固定資産減価償却率（老朽化率）は平成26年に文化会館を整備したため他と比較しても高くはありません。（本市規模の場合、大規模な建設事業があれば数値に大きく影響します。）

将来負担比率についても補助事業や交付税措置のある有利な地方債の活用により将来世代の大きな負担とはなっていません。